小田原史談
第 206 号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

太平洋戦争の頃の話

佐久間　俊　治

一、体験を話したいきさつ

私は1934年生まれで終戦時（1945年）は5年生である。戦前からの記憶も少しはあるが改まって人前で話したことはなかった。一昨年のある時、次女から、小学5年の孫のクラスで戦争の話をしてくれないかといわれた。授業で戦争のことを勉強したいのだが、先生も親も戦争を知らないので誰か話してくれる人は居ないかと先生から頼まれたという。われわれ年代の務めかと思い引き受けた。家内と相談して2つの構成を考えた。

1、紙芝居「わたしのおひなさま」：私たちの母校小田原二中（現白鴎中）の同級生戸塚日出子さん作、70歳記念のクラス会で彼女自身が演じてくれたのを家内が演ずる。（15分：別掲）

2、太平洋戦争の頃の話：私なりに考えた状況説明と私の疎開などの体験談（35分）の2つである。

二、状況説明が大切と考えた理由

昔、フランス革命の時、「パンをよこせ」と叫ぶ民衆について、王妃マリーアントワネットは「彼らは何と馬鹿なのか、パンがなければケーキを食べればいいのに」といったという。それを聞いた時、これは後世の作り話ではないのかと思った。ところが何年か前、ラジオでM氏の話を聞いたが、M氏が戦争中、南方で戦いに敗れ、食べ物もなく、草の根まで食べて命をつないだ体験をあるPTAで話したところ、手を上げた若いお母さんから「食べ物がなかったというお話ですが、Mさんはフルーツはおきらいなんですか」ときかれて本当に驚いたというのだ。

要するに、1つのことを説明されても、その周囲の状況がわかっていないとまったく理解できないのだ。戦争の話も、「その頃の状況」をあわせて話さないと、戦争を知らない人にはなかなか理解してもらえないと考えた。

三、状況の説明

1、なぜ戦争をしたのか

これはとても難しい問題であるが、理由もなくあんな大変なことを始めるわけはない。せめて、その頃までの世界情勢の流れだけは説明しなければならない。

そこで東南アジア、アフリカ、太平洋の島々などを列強先進諸国が次々と植民地化していったこと、ロシアの南下政策などを5枚の大きな歴史地図を準備して説明した。そして日本は明治以降、支配されないよう懸命に先進国になる努力をしながら、中国や朝鮮、太平洋に勢力を拡大していったこと、その結果、先進諸国からにらまれ、遂に石油供給を止められて、国の活動が窒息状態に追い込まれていったことなども話した。子どもたちにどこまで理解してもらえたか分からないが、先生たちや、参加していた何人かのお母さんたちが熱心に聴いていたような気がした。

2、その他の説明のために配ったメモ

家庭

家：木造がほとんど。部屋数は少なく、狭かった。畳の部屋。テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫、クーラーなどはどれもなかった。自動車も一般家庭にはなく、電話のある家も少なかった。

食べ物：お米は「配給」（決まった分量しか買えない）。だんだんお米がなくなり、代わりに小麦粉、サツマイモの配給。遅配、欠配。「代用食」。

衣服：切符制（一定枚数の衣料切符が配られ、それを出さないと衣服が買えなかった）。だんだんと、切符はあっても品物がなくなっていった。

灯火管制：空襲を恐れて、夜、電灯の明かりが外に漏れないように、電灯にカバーをしたり、窓ガラスに紙を張った。

防火用水：道の所々に、消火のための水槽が置いて

あった。

防空壕：空襲の時に逃げ込むための横穴や、半地下の建物など。

学校

3年生からは男女別々のクラス、1クラス50人位。教科書は全国同じ（国定）。難しい漢字：學校、算數、體操、關係、會社、

社会

人口の半分は農業（人、牛、馬の力。）

徴兵制。〝天皇中心〟。工場は「毎日の生活に必要なもの」より「戦争に必要なもの」を作るようになっていった。だから、戦争が始まってしばらくの間はよかったが、だんだん空襲（敵の飛行機が飛んできて、町や工場に、爆弾、焼夷弾を落として破壊すること）が激しくなり、生活物資がなくなっていった。

疎開：都会の児童を田舎へ。縁故疎開（田舎の親類へ、子どもだけ、あるいは母子で）集団疎開（学校からまとまって田舎へ。先生と生徒が。お寺や公会堂などへ）

四、私の体験

1、原子爆弾が落ちた時

昭和20年4月、私はすぐ下の弟（2年生）と2人で広島の田舎の本家（父の生家）へ疎開した。市の中心から20㎞ほど北の山間の農村で、そこにはすでに別の親戚の人たちも来ていた。その中に正行さんがいた。私と同じ5年生で広島市内のお寺の三男だった。

山村の学校は高学年と低学年の2クラスで、先生も2人だけだった。毎日、学校から帰ると農作業の手伝いだった。夏休みになり、正行さんは、広島のお寺に帰った。

8月6日の朝、庭先にいると何かがピカピカッと光った。小さな手鏡で日光を反射させてまぶしがらせるいたずらを誰かがしたのかと思ったが誰もいない。変だなあと思ったとたん「ズシズシズシーン」と、地響きと音が混ざったようなものを感じた。ますます分からない。ふと、上を見上げるとアッと息をのむ。抜けるような青空、近い山の向こうにモクモクモクモクとものすごい勢いで雲が上へ上へとあがっていく。真っ白のあちこちに虹色が混ざっている。しばらくすると落下傘が3つ、ふわりふわりと落ちてくるのが見えたが、やがて見えなくなる。それっきり、何があったのかまったくわからなかった。

2、そのあと見たこと、知ったこと

○夕方になってからだろうか、とにかく広島が大変なことになり、人が大勢死んだらしいという話が伝わる。

○夜になって、あるいは次の日もまたその次も、炎天下でもわらのむしろをかけてもらっただけの被爆者たちが、荷車で次々と親類縁者を頼って運ばれてくる。

○裁判所へ通勤していたおじ（父のすぐ下の弟）が帰ってこない。本家のおじ（長兄）が市内へ探しに行く。真夏だが万一のために防空頭巾をかぶり、手足を覆って行く。市の中心へは、可部線の終点の横川駅から市電で行くのだが、6日の朝、電車を待つ行列の中におじの姿を見たという人（この人は電車に乗れなかったので助かった）の話によって、おじが乗った筈の電車が見つかったが路上で黒こげになっていた。

○やがて何日かして、もう一人のおじ（父の末弟）が顔半分被爆して運ばれてくる。学校の先生だったそのおじはその朝、生徒を引率して勤労動員先へ向かう途中原爆にあった。その瞬間何メートルか飛ばされたという。2ヶ月ぐらいの間に、もうだめだ、とみんながあきらめる容態に2度陥ったが柔道四段の体はとうとう生き延びた。

3、正行さんのこと

夏休みまで寝起きをともにしていた正行さんは、実家のお寺に帰っていて原爆に遭った。お寺の本堂が倒れ、太い柱に体の一部をはさまれて動けなくなった。（母も祖母も、病気の兄もその時亡くなった。）

火が迫ってくる中、住職の父は正行さんを助けようと必死にいろいろやったがどうしてもだめだった。住職は正行さんを諦めて、次にお寺の本

尊をやっと運び出した。正行さんは助からなかった。

正行さんは痛かったろうなぁ。正行さんは熱かったろうなぁ。正行さんは怖かったろうなぁ。

毎年、8月が近づくと正行さんのことをおもいだす。

被爆死の　いとこ思いつつ
草を取る

（付　メモにのせた資料）

ポプラ社　調べ学習　日本の歴史⑧

地獄絵図の中で死んでいった広島市民

中心部近くにいた人は、いっしゅんにして燃えつき、中心部から離れていた人たちは、熱線で体を焼かれたり、たおれた家の下敷きになったり、爆風で飛んできたガラスや木材の破片をあびたのです。

「僕はその時そこにいた人でないとわからないと思う。焼けただれた人たちが、毎日うなりながら日を送り、身よりのない人たちには、うじ虫が体中にわき、何かわからないうわ言を言いながら死んでいく姿は、どうして言いあらわしたらよいのだろうか」（長田新編「原爆の子」岩波書店より）

被爆した小学3年生の少年が見た、生きながらの地獄のような光景です。この爆弾の犠牲となって、苦しみのなかで約15万人の人が死にました。

五、熱心に聴いてくれた子どもたち

こどもたちは紙芝居も、私の話も、熱心に聴いてくれた。

紙芝居には大変な力があることが分かった。身を乗り出して聴く子もいた。

少したってこども達の感想文が送られてきた。これも初めての経験だったが、話やメモをよく理解してくれたことが分かった。いろいろ準備してよかった。ある男の子は、「戦争というのは、どこかほかの所へ行ってやるのかと思っていた」と書いて来た。またある子どもは紙芝居の中で歌った「ひなまつり」などの歌を褒めてくれた。近藤萌さんという子の感想文が、『「平和について」ポスター・作文コンテスト』で「平和を考える茅ヶ崎市民の会実行委員会委員長賞」をもらい、平和大使として広島を訪れたことをあとできいた。私たち夫婦は貴重な体験をさせてもらったと思う。

（終わり）

『わたしの　おひなさま』

これは、太平洋戦争の頃に少女時代を過ごしたヒデコさんの、おひなさまに寄せる思いを描いたお話です。（もとは、12場面のお話ですが、9場面に短くしました。）

＊　＊　＊

①

ヒデコさんの家では3月3日が近づくと、おひなさまをかざって楽しいひとときを過しました。

でも、太平洋戦争が始って3年、ヒデコさんの住む平塚では毎日のような敵機来襲。

とうとう昭和20年7月、真夜中の大空襲で一帯が大火災。みんな郊外へ必死で逃げました。

①

二〇六号（平成十八年七月号）目次

太平洋戦争の頃の話　佐久間俊治……1
戦前戦後の電力事情　市川一郎……6
小田原叢談（五十三）　石井富之助……10
酒匂町小八幡へ焼夷弾投下　譲原良二……11
小田原戊辰戦争の予兆と邂逅　石井啓文……13
新会員……15
長門の浦　高田掬泉……16
旅のつれづれ俳句日記　釼持芳枝……20
明治時代、足柄上郡の名士など（1）　中村静夫……21
二宮尊徳先生並びにそれに続く者の大志と実践　井上成一……24
江戸時代の小田原地方の酒　瀬戸崎雄……26
関東大震災の片浦村米神あたり　植田博之……27
我が歌舞伎事始　田中　豊……28
落穂集……29
東海道五十三次宿場めぐり……30
総会報告……32
特別賛助会員……34

②
次の朝、太陽の照りつける焼け跡の中を、自分の家を探して歩き続けました。焼け残った近所の消防小屋を発見した時、声がしました。
「おーい！」
「ああっ、お父ちゃんだ。お父ちゃあん！」
「みんな、無事だったか！」
父は、生きていることを確かめるように、子どもたちひとりひとりの顔を、ごしごしとこすりました。

②

③
家も　おひなさまも　みんなやけてしまいました。
父の友人の宮下さんの家で、父と一緒にお風呂に入り「うの花のにおう垣根にほととぎす・・・」を歌いました。
そして次の日、父は戦争に行きました。

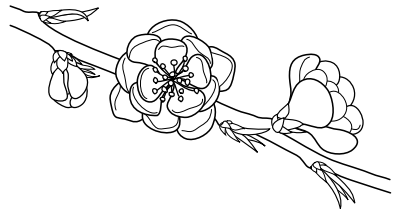
③

④
父が生きて帰って来ました。
みんなで、父の実家、掛川から小田原へ移りました。
父母と子供そろってちゃぶ台。
とてもぜいたくでしあわせでした。

⑤

④

⑤
翌年の三月三日。平和なひなまつりを迎えました。
その頃、古い城下町の小田原には、『お配り』という女の子だけのお節句の行事がありました。それは、女の子たちが、ご馳走を詰めた重箱を持ち寄って、おひなさまを飾った家を順に訪ね、おひなさまを見ながら、ご馳走を交換しながら、いただくというものでした。
この『お配り』に、空襲でおひなさまを焼いてしまった私も誘われて、出掛けました。母は、たぶん苦労して、持っていくご馳走を作ってはくれましたが、何か不安な様子でした。

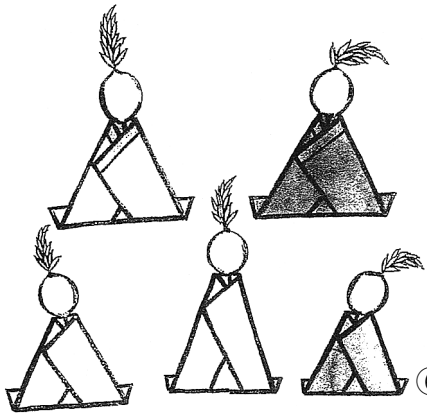


⑥

その年の夏休みに、母に誘われて、私は、「じゅず玉」と呼ばれる草の実でおひなさまを作りました。

川端で、母と妹二人といっしょに、まだ青いじゅず玉をたくさん取りました。

草の実の小さなおひなさまでしたが、それは久し振りの「わたしのおひなさま」でした。



⑥

⑦

じゅず玉のおひなさまを作った時から、長い年月がたちました。そして、私の心に再びおひなさまへの思いが戻ってきました。

庭に早咲きの桃の花が咲く頃になると、むらのこども達や折り紙の好きな仲間と共に、おひなさまを作るようになりました。

おひなさまは、人から人へ笑顔を広げ、笑顔を伝える不思議な力を持っている・・・・そんな気がします。

⑦

⑧

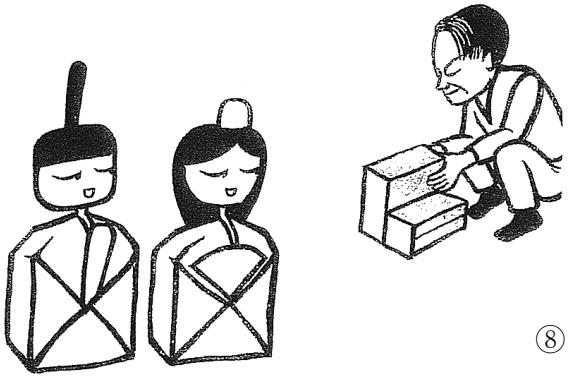
今年の春は、「風船びな」を作りました。折り紙の風船から作った紙びなです。

「どう、今年のおひなさま、かわいいでしょう」

出来上がったおひなさまを見せながら、夫に声を掛けました。

「うん、いいね。賑やかにたくさん作って、広島のサキちゃんに送ってやろうか」

夫は、早くも段ボールでひな壇を作り、それを納める箱まで用意しました。



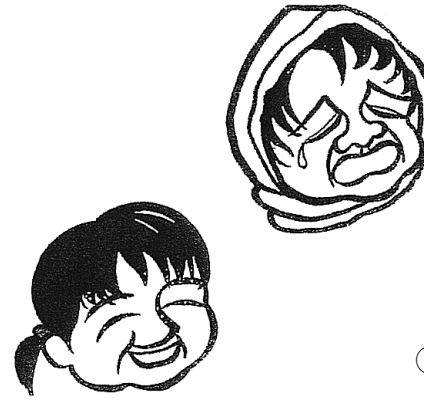
⑧

⑨

出来上がった風船びなの笑顔とサキちゃんの笑顔が重なった時でした。

この間、テレビで見たばかりの絵が、目の前に広がってきました。それは、大粒の涙を流しながら、戦争で離れ離れになったお母さんを探している、アフガンの子どもの姿でした。

サキちゃんと同じ四歳ぐらいの、大きな目をした女の子でした。



⑨

原文　とづかひでこ
原画　はせがわひさこ
制作　『いのちの花』編集委員会

戦前戦後の電力事情

市川一郎

少し古すぎますが、筆者は大正八年に小田原電気鉄道㈱（東京電力㈱の三代前）に入社し、室内電気工事を担当しました。

二宮以西の名士の家を御用聞きに歩く事になり、氏名を失念した方も有りますが、富士フイルムの森田茂吉、益田孝、野崎広太、広田家等は印象が深くあります。

小田原で、益田鈍翁、松永耳庵、野崎幻庵の三翁は三茶人と言われますが、野崎さんのご指示で、筆者が電気工事をした茶席が早川と浜町に在ります。

野崎様との出会い

何時ものように御用聞きにお伺いしたとき、茶室へつける電灯の事でご相談が有り、工事については、益田様が面倒を見てくださることになりました。

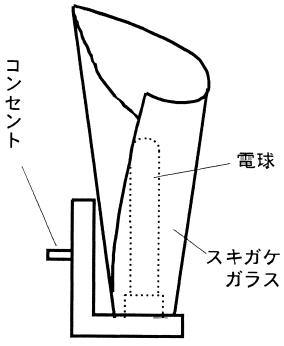
益田様のご指示は、

第一に、電灯器具は、昼間は取り外しが出来ること。床柱につける灯具は、ロウソクで照らした様にするということでした。参考に紙を漏斗形に巻き実物状の見本を見せて下さいました。

そこで、天井灯つり下げ用の鉤は、釣り針形の絶縁物の両側に金具を付け、照明器具側には、輪型の内側に金具を付けて、掛けた時に前記の金具に接触するようにしました。

床柱には写真1のようにコンセントを取り付けておき、夜間は第1図のような器具を取り付けるようにしました。

写真1



第1図

第二は、器具の色を溜色（ため）（皇室御料車などに使われている艶のある黒みがかった小豆色）にすることでした。

メーカーが塗装してきた色は、四、五回やり直しても満足出来ませんでした。結局、益田様が板橋の漆屋に頼まれ、何とか仕上げることができました。

板橋の職人だけで、家が建てられるというほど、いろいろな職種の優れた職人がいたと聞きますが、さすがと思いました。

第三は、夜間、屋根裏から電灯の光で、月あかり様にするということでした。

これは当時の技術では出来ないので、おことわりしました。

今なら、大型液晶パネルなどで、季節、気分に応じ、天の川でも、流れ星でも自在になるでしょう。

戦後、財産税として多くの住宅、別荘が物納されたようです。

野崎邸もその一つで、その後母屋は改築され、平成三年には、茶室が板橋に移築されることを知りました。時の持ち主の了解をえて撮影したものが写真2です。床柱のコンセントは有りましたが器具はなく、奉書を巻いた形のスタンドがありました。

天井灯具は、規則の改正で通電部分が露出するものは使用不可と成り、交換されていました。

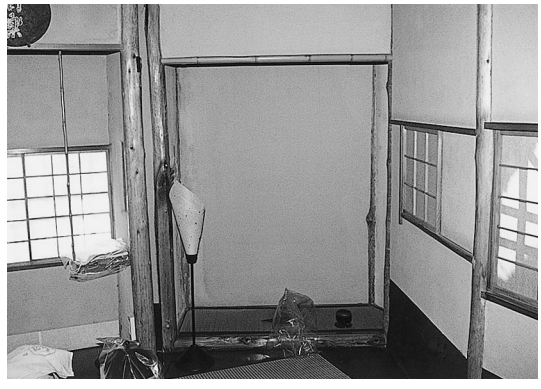


写真2

難しい電気工事だった早川の茶室（写真3）が、国府津に移築保存される事を新聞報道で知りました。

内装完成後に、外観を損なわないように工事することが要求されたのですが、電動工具などもなく、柱の芯に電線を通す工法で難儀した建物です。

長年の間に補修工事も重ねられ、また長らく使用されずにあったこともあり、撮ってきてもらった写真でみる現状は、当時をしのぶよすがもなくかわっていました。

何れをとっても、現実は、老人の回顧心情を押しのけて進んでいます。

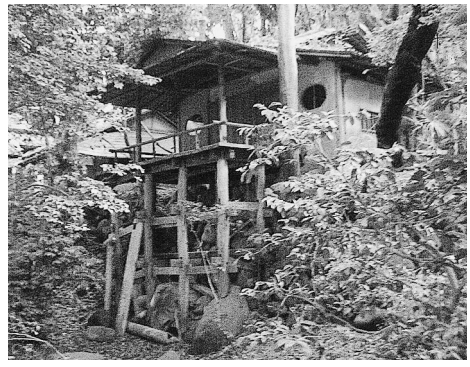


写真3

終戦当時の横浜

筆者は、昭和十一年に小田原を出て、電力会社統合などでいろいろ会社がかわり、昭和二十年十二月に、横浜の高島町に在った関東配電神奈川支店業務課に転勤になり、電力利用の開発と使用合理化に従事する事に成りました。

当時の横浜は、駅を出ると一面の焼け野原で、遠く迄見通す事が出来ました。あちこちに崩れかけたコンクリート建物がみえ、クレーンが先端に見かけ一メートルもあろう鉄の玉を吊るし、左右に振り回して、最後に建物に当てると砂ほこりを立てて倒壊し、次々に整理されていきました。

終戦直後、進駐軍のかまぼこ兵舎が並んでいた横浜駅の西口は、相模鉄道の砂利置き場に成っており、残った所は闇市場で、小さな店でごった返していました。夜は青い灯、赤い灯の一杯飲み屋が軒を連ねて居ました。

外国人の靴磨きに、靴裏に迭鋲を打ってくれと頼んだところ、靴を受け取るや「裏革を全部剥がし、取り替えなければ駄目だ」と言って靴を投げ出しました。行きがかり上、止むをえず高い金を払わさせられました。

電力利用の開発

終戦直後産業が壊滅したため、全国的に電力が余りました。そこで電気を使うことが奨励され、都市では木炭、ガス等の燃料が極端に不足していたため、六百ワットの電気七輪が調理用、暖房用として多数使用されるようになりました。また食糧事情は、種々な変則的な使用を出現させました。

その一つが電気パン焼き器です。小麦粉の配給があっても、燃料事情が悪い都会では、これを調理する事が出来ませんでした。そこで、余っている電力を使う電極式パン焼器が手作りで造られ、全国的に多く使われました。

木箱の内側の両端に鉄板2枚をとりつけ、小麦粉に水と重曹を練って箱に入れ、鉄板に百ボルトの電気を加えると発熱し、水分が抜けると電流がとまり、蒸しパン状にできました。食べられるというだけで風味なんて何もない代物です。仕事柄、我が家は早かった方で、電極も珍しいステンレスでした。

産業の復興につれ、終戦の翌年には早くも電力不足を告げるようになりました。

電力不足に対処するため、緊急避難的にすこし電圧を下げたり、発電機の回転を少し減らしたりして（深夜に回転を増し、電気時計が遅れないようにした）対応しましたが、これにも限度があるので、一部停電をして対応しました。最初はお客様の準備も有るので、予告しておりましたが、万引きや、窃盗が多いので予告を止めました。

この様な事情から、効率の悪い機械には電気の供給が制限されました。

パン焼き器も他の熱源が使用出来るようになって増設が認められなくなりました。

電子レンジの始まり

終戦直後、木材の乾燥に高周波の電気を使用したいという業者が見えました。

名刺を見ると医学博士と有り、電気に医学は不自然なのでお尋ねすると、北海道大学の電気工学科の出身で、軍需関係の会社に入り、軍の命令で強力光線で飛行機を落とす研究をしていたそうです。手始めに米を食う「こくうぞう虫」を殺す研究をして成功したので、博士論文を工学科に提出したところ、生物のことだからと、あちらこちら回され、結局医学に落ちついたとの事です。戦後、戦争犯罪人にされかかったのを、医学と言う事で逃れたそうで、工学なら戦争犯罪人にされていたかもしれないとの事でした。

木材の乾燥は、自然乾燥では数年かかり、蒸気乾燥では外部は乾くが内部は乾かない。そこで高周波の電気で乾燥すると、内部から乾燥するので早く良い製品が出来るとの事でした。

その後、此の加熱方法は各種の産業に応用され、ベニヤ板の接着、曲げ等各種の分野に広まりました。小田原では大同毛織で羊毛の乾燥に使われました。

何処で聞いたか高周波でパンが焼けないかとの相談も有りました。電力会社には設備がないので、後述の電気ボイラーで関係の有った商工省の電気試験所に依頼して、実験をしましたが、うまく出来ませんでした。

今家庭での必需品「電子レンジ」はこれを小型にした物です。

蒸留したばかりのウイスキー

に高周波の電界をかけると、熟成されたように、まろやかな味になるという説がT醸造などで実験されました。

そんな関わりで、戦後貴重なウイスキー（のサンプル？）をいただくことがありました。元々アルコールに弱い私ですが、折角のことだからと少しずつなれてきて、それからごく少量ですが晩酌をやるようになったのです。

終戦前後の頃は、我が家は6～8人の大家族で、生活も大変な時代でした。この貴重品は時々余所にまわり、姿を変えて子供たちの口に入った事もあり、大変助かりました。

同じ頃、似たような話があります。当家は、先代が拓いた足袋製造職はやめて、併業していた今でいうコンビニ店で、塩、煙草なども売っていました、

煙草も窮迫し、一戸毎の割り当て販売制になりました。それも巻き煙草の中身だけで、自分で紙を巻くのです。それでも、定期日には朝早くから店先にお客さんが並んでいました。

煙草を商いしていても、私は煙草をやりません。そこで、我が家分の煙草は姿を変え、これも家族のお腹を満たしてくれたのです。

農業電化

終戦後数年は、ひどい食料難で食料増産が急がれました。その対策として農業の電化が進められ、田圃の揚水や脱穀に電力が使用される様になりました。

ギーコンギーコンと懐かしい音のする足踏み式脱穀機に代え、モーターで動かす脱穀機は数も多く、移動して使用するので、いろいろ工夫がいりました。

普通は3線で動かすモーターを、危険の少ない2線で動かすように細工したり、2本の電線の先を鉤形に曲げ、それぞれ竹竿の先にくくりつけ、急ごしらえのひょろひょろの電柱の電線に引っかけて、電気をとるという、危なっかしい方法もやっていました。

橘郡川和村では、竹藪に電熱線を埋設し、竹の子の促成栽培が試されましたが、採算が取れず失敗に終わったようです。稲の育苗や、いちごその他の野菜の栽培にも使用されました。

栃木支店から、いちごの苗を分けてほしいと神奈川支店に依頼があり、厚木営業所管内で、電熱育苗をしておられる農家に分譲をお願しました。

栃木支店からは、係員と農家の人が出向され、育苗方法等を聞いて帰られました。今は、栃木はいちごの大産地となり、庇を貸して母屋を取られた形になってしまいました。

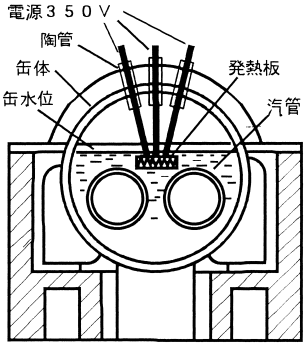
電気ボイラー

終戦前から一般産業には石炭の配給が無く、製紙業が盛んな静岡県の三島地区では製材業の残材等を燃料にしていました。そのころ、一業者が高圧電気を直接ボイラーに入れて加熱する方法を考案しました。

この方法は小型には不向きですが、中型以上に利用され、二万二千ボルトで千五百キロワットの物が大日本麦酒で造られました。

小型のボイラーには第2図で示すような、電熱線を直接灌水に入れる方式で、最大で五百キロワット程度の物が多く使われました。

此の設備は東電管内で約一千軒設備されましたが、感電事故は全く有りませんでした。



第２図

電気製塩

戦争で塩の輸入が止まり、ソーダ工業初め、食用にも事欠くようになりました。

東京電力㈱でも、藤沢の腰越海岸の小屋で電気製塩を試みる事になりました。直径、高さ、五メートル位の酒樽を借り、これに海水を揚水しました。厚い鉄板を三角形に配置して吊り下げ、三百五十ボルトの電圧をかけ、鉄板を上下して電流を加減するようにし、泊まり込みでデータをとりました。

此の方法では、1キログラムの塩を造るのに、40キロワット時の電気を要するので、戦後は、孟宗竹の枝を竿掛け状に並べ、蒸発面積を広げて濃縮して蒸発器に送り、源単位を下げるように工夫しました。

神奈川県では、辻堂海岸、大磯海岸に専用の変電所が造られました。

酒匂には製塩研究所が作られ、今も名前を変えて残っています。

公衆浴場の電化

電力も不足していましたが、石炭その他の燃料も不足のため、止むをえず公衆浴場の電化が行われました。

初めは、動力線と同じ二百ボルトで、水中に入れた鉄ニクロム線を加熱する方法が多く使わ

れました。次に、熱線を節約するため、変圧器を特別な方法で三百五十ボルトに変更しましたが、鉄ニクロム線の入手も困難になり、鉄棒を水中に入れこれに電気を通じ、直接加熱する事が始まりました。

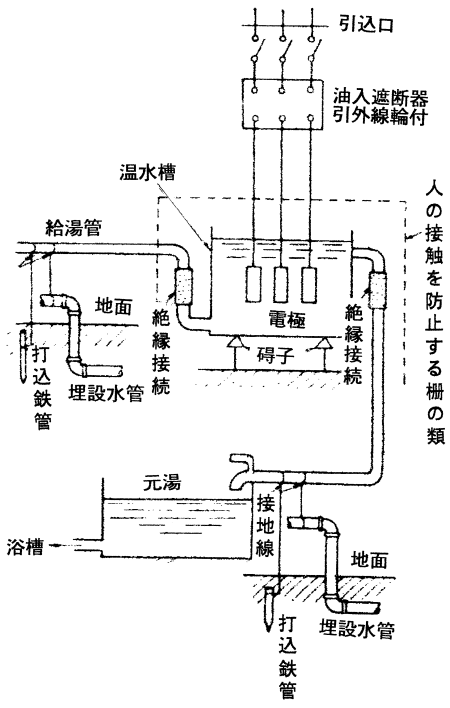
変圧器の入手も困難になると、高圧碍子で絶縁したドラム缶に鉄の電極を三本入れ、三千ボルトで直接加熱する方法が始まりました。この方法では、浴客が感電しないよう第3図の様に、特に厳重にアースをとる対策がとられました。

以上三つの設備は、電力が逼迫するにつれ、余力の出る深夜だけ供給する様になりました。

戦前、箱根の神山と田島の弁天山の航空灯台に、スイス製の日の入り三十分前に点灯し、日の出三十分後に消灯するスイッチが付いていた事を思い出し、出退勤時に使用されているタイムレコーダーのメーカーに相談にいきました。

ゼンマイは一ヶ月に一回巻き、それで誤差が五分以内に納まるようなタイムスッチが出来ないかと相談しましたが、当時、時計は一日に五分以内の誤差は許されているので、とても出来ませんと断れました。

そこで電力の記録計を取り付け、検針時に回収して調査する事にしました。



第3図　公衆浴場の電極式による電化

電力の使用合理化運動

電力不足に対処するため、ボイラー、製塩、浴場について合理化委員会ができ、合理化の程度によって需要家毎に一ヶ月の使用枠が決められました。

電気浴場は深夜に沸かしたお湯を翌日使用するので、保温にいろいろと苦労しました。

当時外灯には、今のように暗いときだけ点く自動スイッチは無く、柱の下にスイッチが付いていました。誰かが夕方に入れ、朝切る決まりがあったのですが、なかなか実行されず、昼間も点いたままのことが多く、進駐軍にも強く指摘されました。

戦前からの此の運動を、実効あるものにしようとして、「電力は国の宝神泰川県実効委員会」が設立されました。その手始めに、外灯の消灯を小学校の児童にお願いすることとし、県教育委員会の快諾も得ました。

当時不足しがちの鉛筆に**「電力は國の寶神奈川縣實行委員會」**と名入れし、前記名の依頼状を添え、営業所を通じて各学校にお願いしました。そして鉛筆と依頼状を持ち、県の教育委員会に経過報告に行きました。すると両方を一覧し、「この中には　国、宝、県、実、会、の旧字が使われており教育委員会としては誠に困ります。」と言われてしまいました。

会員の方には此の鉛筆を手にされた方も在るかと思いますが、お気づきになりましたか？

平塚の七夕照明コンクール

当時、電灯は大部分が白熱電球でした。蛍光灯は効率は良くても、当初は、色に青味が多く広まらなかったのですが、その後大分改善されたのでその普及に努力しました。

一例として、昭和二十六年に平塚市で行われた第一回の七夕祭りに、市と共催で照明コンクールを実施し、蛍光灯普及のキャンペーンを行いました。

七夕には雨がつきもので、終わり頃には大分損傷しました。翌年は、東電の平塚営業所が、横浜ゴムからビニールの端切れを貰い受け、飾り付けして特別賞を受領しました。次の年からは全部ビニールに成りました。

初年にミス七夕のコンクールが開催され、市の助役？のお嬢さんが当選されました。その日のうちに、交際して欲しいと言う電話が沢山あったそうです。

いろいろな意味で、世の中は明るくなっていきました。

（曽我谷津在住一〇四歳、最年長の会員です）

小田原叢談（五十三）

石井富之助

しろうと史話―はじめに

わたしは、あまり人のやらない仕事をしている。それは図書館の郷土資料を除いた一般図書の中にふくまれている郷土関係の記事の書きぬきである。こういっても皆さんにはまだ良くわからないかも知れないので、一とおり説明しておこう。

図書館では郷土に関する資料は、すべて郷土資料という項目の中に分類している。したがって、皆さんが郷土のことを知りたい、調べたいと思ったら、まず郷土資料の目録を見れば、大体必要な資料をさがすことができる。

しかし、郷土に関する事柄は、かならずしも郷土資料というような、はっきりした形をとったものだけに限らず、一般の図書の中にも実にたくさんふくまれている。

たとえば、藤岡通夫著『城と城下町』という本の中には「江戸時代の典型小田原城天守」があり、読売新聞婦人部編「味のすべて」には「かまぼこ――弾力ある小田原式」という記事がある。東大出版部の『日本人の読み書き能力』には小田原市民の読み書き能力の調査がのっており、小山一郎著『日本産石材精義』には足柄下郡産の石材いわゆる伊豆石のことが、相当くわしく書いてある。

これらはすべてその本の一部なのであるから、本そのものは一般図書として分類される。そうやっていったん分類され、書棚にならべられてしまうと、もはや背中の標題だけ見ている限りでは、その本の中に郷土関係の記事があることなどまったくわからなくなってしまうのである。

したがって、こういう記事の目録を作っておくことが図書館の重要な仕事になってくるのであるが、これは口でいうほど簡単なことではない。一冊の本を手にとって、この中に小田原のことがあるかないか調べるには、目次を見たり、索引を見たり、ある場合には一ページ一ページ全部めくってみなければわからないことだってある。

これから買う本についてなら、ある程度までは出来るかも知れないが、現在までに集めてある何万冊の本のページをさかのぼって全部めくることなど思いもよらないことである。さいわいわたしは在職中にこのことにいくらか心を止めてきているので、どの本の中にどういう記事がのっているか、おおよその見当がついている。してみると、これはどうやらわたしのやっておくべき仕事であるらしい。一つ手をつけてみるかと思い立ったのが、一月のはじめであった。

いざやり出してみると、どうも目録だけでは味もそっけもない。どうせ遊んでいるのだから、いっそのことその記事の書きぬきまでやってしまえと考えた。早速手をつけて、現在までに二百五十字詰原稿用紙で約千八百枚、在職中すでに書きぬいてある。むかしの紀行文の抜粋や和歌、民謡などを合わせると二千枚を超えるほどになった。この仕事はあとからあとから新しい本が出てくるのだから、一生かかっても完結しない。これからもずっと継続しようと思っているが、ここらで一服して現在までにできあがっているものは、図書館に寄贈しようと思う。

郷土研究家は、これと同じことを皆やっている。しかし郷土研究家の場合は、自分の研究目的に合致する資料をあさるだけであるのに、わたしの場合は、なんでもかんでも手当たり次第、歴史、地理から、産業、文化、芸能まで全部にわたる。ここが郷土研究家とわたしのちがいである。

世間では、わたしのことを郷土研究家と思いちがいをしているらしいが、わたしには研究目標はまったくない。しいて目標はと聞かれれば、皆さんのどんな質問に対しても答えられるような目録を作ることであって、これは研究ではない。かれは郷土史家であり、われは図書館屋である。どうぞ間違いのないように……。

しかし、この仕事をしていると、むかしの本の中には「ほほう、こんなおもしろい話があったのか」と思わされるものがいくつもころがっている。わたしは研究家ではないから、それが本当のことであるのか、それともまっかなうそなのか、そんなことはどっちでもかまわない。

真偽のほどは専門家におまかせして、むかしの本を見たらこんなお話がありましたよ、といった具合にいくつかの話題を提供しようと思う。

表題を「しろうと史話」としたのはこういうわけである。

付記　この原稿は昭和四十六年七月十八日より神静民報に連載したものです。

平成六、一、一〇

編者註　石井富之助さんは、この二年後平成八年四月十七日八十九歳で他界されました。

これまで〝小田原叢談〟では、小田原に関して多方面にわたった興味深い蘊蓄にふれることが出来ました。小田原の「生き字引」と言われた所以がよくわかります。殘された原稿はまだまだあります。ご期待ください。

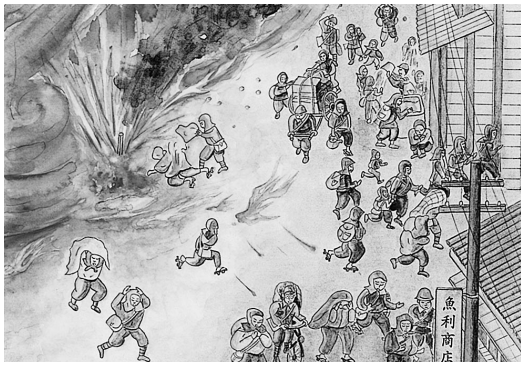
酒匂町小八幡へ焼夷弾投下

譲原良二（文・え）

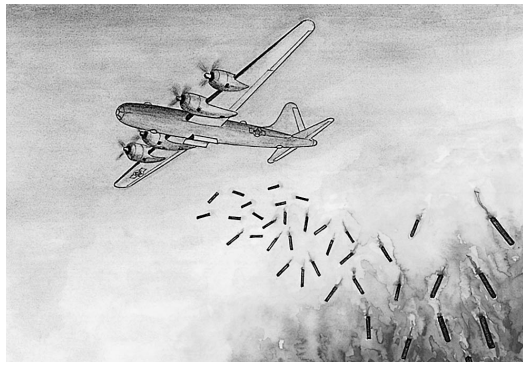
僕は酒匂町の国民学校六年生
昭和二十年八月始め大東亜戦争も末期

毎日が空襲警報のサイレンが鳴り響き、学校へ登校しても途中で帰えされる日も慣れてしまった。夜は厳しい灯火官制。毎晩のように、夜中のサイレンで起こされる。誰もが寝間着に着替えずに服を着たままの毎日、警戒警報のサイレンが鳴るとすぐ空襲警報になる。家族は縁の下に掘った屋内防空壕に避難するが、弟は四年生いつも防空頭巾を被ったまま退避しないで縁側で眠っていた。当日の夜、僕は父といっしょに外に出て空を見ていたら東の方角より微かに爆音が近づいて来た。その時ザーッという豪雨が降るような音がして焼夷弾が花火のような、キラキラ光りながら落ちてきたのを見る、その直後小八幡へ落ちたと、父の叫ぶ声がした！東の空が真っ赤な炎になっているのを見て、すぐ防空壕へ退避したが、さほど恐怖心はありませんでした。僕の目には戦争は悲惨なものというより勇ましいものに映っていたのです。神国日本は「撃ちてし止まん」の精神で鬼畜米英を大和魂をもって撃ち砕き天皇陛下の為に死ぬことが一番の名誉と教えられ、戦争は絶対に勝と思っていた。

自画像

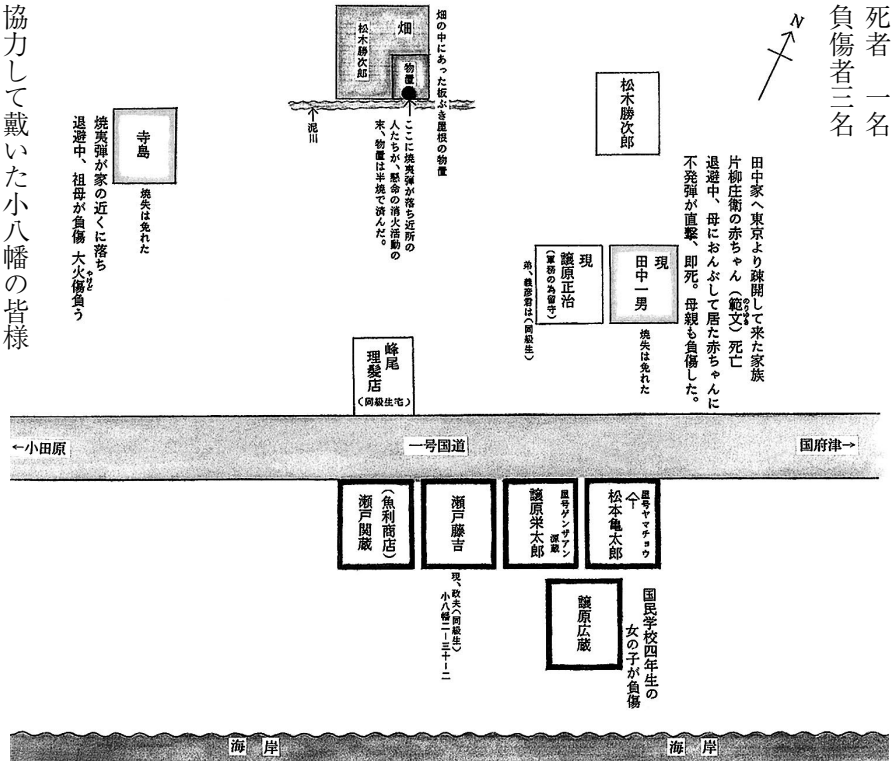


焼夷弾投下・退避中


小八幡上空・焼夷弾投下

小八幡に投下した焼夷弾は八王子・夜間空襲二十年八月一～二日B29が退却する際の捨て逃げ空襲であった。

死者　一名
負傷者三名



酒匂町小八幡へ焼夷弾投下・被害を受け全焼の家と死傷者の出た家

協力して戴いた小八幡の皆様

松本清太郎さん
田中一男　さん
魚利商店　さん
譲原正治　さん
瀬戸政夫　さん

ありがとうございました

焼夷弾M69について

ガソリンにゴム、灰汁ならびにココナツ油のゼリー状の混合剤を加えたものであった。このゼリー状のガソリンが「ナパーム」の名称でひろく知られるものとなった。

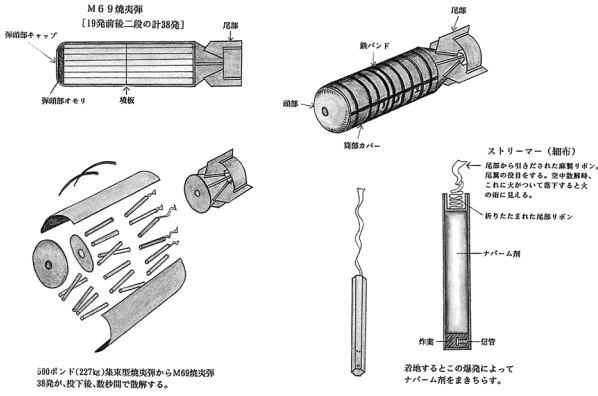
特徴としてまず上げられるのは長さ二十インチ（五〇・八センチ）、直径三インチ（七・六二センチ）、正六角形のその鋼鉄製本体には従来の爆弾と違って、水平安定翼がなかったことである。そのため外見はブリキ缶のようだった。搭載時には三十八発の収束状態にあるが、投下数秒後には帯が解かれバラバラとなる。その点でM50と共通していたが、違うのは凧の尻尾のような長さ三フィート（九一・五センチ）のストリーマー（細布）が落下時に後部から飛び出すことだった。最長の丈まで伸びきったストリーマーは焼夷弾の揺れを防ぎ、落下速度の調節役として機能した。

建造物の屋根を突きやぶると時限式導火線が作動、そして五秒間以内にTNT爆薬が炸裂し、混入されたマグネシウム粒子によってさらに布袋に入ったナパームに点火する。

最大の特徴はつぎの点にあった。燃え上がったナパームは本体尾部から噴射しながら、そのエネルギーであたかも小型砲弾のように鋼鉄製本体自身を百フイート（三〇・五メートル）の距離まで飛ばすと同時に、壁面や床など可燃性物体を長時間にわたって火炎に覆いつつみ、完全燃焼させるのである。

E・バートレット・カー　著より

焼夷弾M69の図



（現在は千代在住）

小田原戊辰戦争の予兆と邂逅

～補追・小田原が暗転した日～

石井　啓文（ひろふみ）

はじめに

南町の大蓮寺に「戦死の墓」がある。明治維新の小田原戊辰戦争山崎の戦いで遺棄された遊撃隊士二十二名を埋葬した（『西さがみ庶民史録』）と記され、無名の戦士たちの墓とも言われている。

二月六日、「風土記の会」で本町周辺のお寺廻りをした際、その墓に「静岡藩」と読める六名の名が刻まれていることを知った。

昨年の本誌一月号（第二〇〇号）「小田原が暗転した日」で、戊辰戦争の墓碑銘を訊ねたとき「無名の墓」を信じた私は、調査をせずにいたのである。

静岡脱藩士の墓

○戦死の墓

（大蓮寺・小田原市南町）

（正　面）　戦死の墓

（右側面）　明治紀元歳□

戊辰五月

（左側面）　静岡藩

澤　録三郎

石川　次郎三下

和田　考之進

千丈　信□

内藤　□吉

浅野　□吉郎

（台座正面）金拾圓　祠堂金

大正六年二月二十六日

人見　寧

本多　晋

玉虫　教士

古澤　秀弥

間宮　魁

前田　信利

金五圓　寄附

小柳津要人

大蓮寺「戦死の墓」

大正六年（一九一七）とあるが、湯本山崎で戦死した不明の遊撃隊士から、同年までに判明した静岡藩士六名の名を刻んだのであろうか。箱根町芦川の興徳庵跡墓地にある「遊撃隊戦死者の墓」も「大正六年十月三十日建之」とある。

同年は五十回忌にあたる。

台座前面には、人見寧を始め七名の名前がある。間宮魁と小柳津要人（岡崎脱藩士）は、前記墓石の建立者でもある（本誌第二〇〇号参照）。二人は小田原戦役後、人見勝太郎とともに函館戦争をも戦いながら生き残った遊撃隊士であろうか。五十回忌に、戦死した同士を偲び二つの墓石を建立したことになる。

人見寧は、抜け駆けだったとも言われる箱根関所攻めを強行した元遊撃隊長の人見勝太郎で、維新後は勝海舟の紹介で鹿児島の西郷隆盛を尋ねた後、静岡で私立英学校を経営し、その後、新政府に採用され茨城県令になった。

湯本早雲寺の遊撃隊士供養碑の撰文も彼である。

遊撃隊士の御子孫に会う

「戦死の墓」の前記解読文を大蓮寺にお届けすると、ご住職夫人が、「数年前、千葉県の方がご先祖を訊ねて来られましたが判りませんでした」と言われた。

私が、『小田原史談』に戊辰戦争の墓碑銘を記したことを伝えると、「名刺を頂いているので判るかも知れませんね」とのことであった。

数日後、「名刺に〈廣部一〉とあります。石井さんの調べられた日金山東光寺にある〈広部正邦〉（本誌第二〇〇号参照）の御子孫ではないでしょうか」と、知らされた。

こうしてご住職夫人から『小田原史談』が木更津市の廣部一氏に送られ、私は五月十七日、同氏にお会いすることになり箱根にご案内した。

同氏の話によると、ご先祖は箱根芦川の興徳庵跡墓地「遊撃隊戦死者の墓」にある七名の内、私が「廣□惣治」と記したのは、「廣部与物治」（□は二字が欠けていた）同氏の曾祖父で請西藩家老であった。日金山の「広遍（部）正邦」は廣部一族にその名は見られず、同姓であるが御子孫については判明しないと言われる。

現在、興徳庵跡墓地は箱根の興禅院で管理されていると知り、同院の田中圓海師をお訪ねした。

同師の話によると、私が建立者の一人に石内吾九郎と記しているのは誤読で、「石内吉九郎」で箱根宿本陣であった石内家の人である。この墓は元は山の中腹にあり、現在地に移されたものと教えられる。

湯本早雲寺の遊撃隊士の墓も、福住正兄はじめ、村人の協力により建立されている。当時、

村人は佐幕・勤王の別なく接していたことが知れる（本誌第二〇〇号参照）。

是非はともかく、国を思う一心の行動から異境の地で戦死した遊撃隊士たちの無念が偲ばれた。

薩摩藩士の墓

○三士の墓（大乗寺・小田原市栄町）

（正　面）慶應三丁卯歳
林川本性霊位
十二月廿八日

（右側面）當寺二拾九世
日守代

（左側面）江戸高田
亮朝院隠居
妙守院日護
志之

五月十五日、「風土記の会」で栄町の大乗寺に参詣した。ご住職から「三士の墓」に案内され、次のような話を教えられた。

「ここに眠られているのは薩摩藩士三人の首級である。正面に〈林川本〉とあるのは過去帳に、

慶應三卯年十二月二十八日
林丘院道悟日芳居士
俗性　栗林芳五郎
川入院一乗日均居士
俗性　早川均
本有院法性日嘉居士
俗性　坂本嘉三郎

とあり、三人の院号の頭文字で、俗姓からの一字でもある。胴体は殺害された須山（裾野市）で埋葬され、現在、須山では〈殉難三士の墓〉と呼ばれている。数日前、私は須山に行きお詣りしてきました」

いただいた資料は、概略次のように説明されている。

「慶応三年、小田原藩の捕手に追われて須山から十里木に逃げて来た薩摩藩士の大部分は、領地の違った下の勢子辻まで逃げて行ったが、腹が減った三人の者は十里木の問屋に入って〈飯を食わせて呉れ〉と頼んだ。家の人は〈相憎く飯は食ってしまった、炊くまで待てるか〉と言えば、三人は（ここまで来れば大丈夫だろう）と思ったから〈炊いて貰いたい〉といい、飯の出来る間に巡礼姿に身を変えるため白装束に着換え、向いの横山直枝のお婆さんに来て貰って髪を結い直し〈もうこんな物はいらない〉と刀は問屋に呉れてやった。その間に一人の男が時々中の様子を伺（窺）っている風なので（これは怪しい）と思って三人が表に飛び出したところを三十人ばかりの捕方が一人を射殺した。残りの二人は裏の畑へ逃げ、熊笹の繁みに潜り込もうとしたところを撃たれた。三人の首は小田原に送られ、胴は須山に埋められた。これは十二月二十八日の出来事である（十里木・横山直枝、勢子辻・河村）」（『須山あれこれ』）

大乗寺「三士の墓」

薩長連合の陰謀

「慶応三年（一八六七）十月の上旬、江戸の芝新馬場にある薩州鹿児島藩の上屋敷へ、益満休之助と伊牟田尚平の二人の薩摩人が（中略）到着した。この二人は、江戸へ、死ににやってきたのである」

この頃、薩長連合と言われた薩摩と長州両藩は、幕府を攻撃するための口実を得るため、江戸市中に放火強盗など、挑発行為に出ていた。

前記文章は、こうした罠とも言える戦略を暗示している。長谷川伸著『相楽総三とその同士』の書き出しである。

この作戦は成功し十二月二十五日、幕府は薩摩藩上屋敷を攻撃し、翌年正月の鳥羽・伏見の合戦に繋がった。また、この作戦は江戸市中に留まらず関東一帯にも計画され、山梨県で騒動を起こすべく薩摩屋敷を出発し、小田原の支藩である荻野山中陣屋（厚木市）を襲おうとする一隊があった。

小田原藩の対応

この事件を小田原市立図書館蔵『明治戊辰小田原藩情概略』は、次のように記している。

「是より先、薩藩は討幕の名なきに苦み徳川氏を激せしめて彼より事端を啓かしめんと欲し、江戸藩邸に於て大に浪徒を募り其徒を放ちて府の内外及相州野州等の各地を剽掠騒擾せしめしか、其相州に向へる一群鯉淵四郎等数十人は十二月中旬荻野山中藩の陣屋を襲ひて之を火付、更に厚木旁近を却し将に進て小田原に向はんとす、我藩乃ち兵を発して酒匂川橋を扼守し（後略）」

この後、藩兵を率いて出陣した小田原藩用人関小左衛門美章の『六十夢路』は、次のように記している。

「直路第六天越ト云フ峻険ナル捷径ヲ執リ山北村ニ出レハ、賊徒ハ神縄村ニテ中食シ、川村関所ノ山北ヲ越テ駿河路ニ逃逸セ

リト聞キ、駆足ニテ之ヲ追フニ、二更駿東郡竹ノ下村ニテ其後群ニ追及ス、賊徒狼狽拳銃ヲ放チ散乱シテ西走ス、然レトモ暗夜咫尺ヲ弁セス、若干ノ分捕ヲシテ追止ヲ令シ、民舎ヲ借リ兼行長駆ノ労を慰ス、時ニ郡吏林某郷足軽ヲ卒ヒ先駆シテ十里木ニ於テ賊徒三人ヲ銃殺シ、残賊ハ皆他領ノ山林ニ逃入セリ、余ハ御殿場ニ於テ此報ニ接スルモ、恣ニ他領ニ入リ追捕スルハ法ノ許サ、ルトコロナレハ、同村ニ一泊シ、二十八日帰城復命ス」

こうした記述が、大乗寺の「三士の墓」および須山「殉難三士の墓」と付合している。

小田原戊辰戦争の始まり

慶応三年十二月三十一日の大晦日から元日にかけて、上幸田（現栄町）の藩士嶋村又市方から出火し、台宿町・一丁田町・青物町など小田原府内の中心部を焼く大火になった。

その原因は、前記事件の影響もあり浪人者が放火・抜刀しているなどの流言が拡がり、火消し活動が妨げられたからだとも言われている。

火は午前二時過ぎに一旦鎮火したが、明け方になって三ノ丸隅屋敷の藩士松本蔦之助方から出火して四戸を焼き払ったという。

この様子を前記『六十夢路』は、次のように記している。

「本日（十二月晦日）ハ旧ニ依リ毎戸迎歳ノ準備ニ汲々タルモ、君公ハ甲府城ニ在セラレ、当城モ未タ威厳ノ令ヲ解カス、然ルニ此出火ヲ以テ満市街誠ニ粛然タリ、慶應四戊辰正月元旦君公ハ甲府城ニ越年セラレ、小田原城ハ奥方ト浄心院様ハカリナレハ、公然タル年賀モ行ハレス、加之世上ノ形勢ハ不穏ニシテ、朝ニタヲ謀ラサル景況ナリシニ、昨夜ノ出火ハ鎮火セシモ余燼未タ尽ス、巳牌ニ三ノ丸隅長屋突然焼失ス、之昨夜ノ飛火ナリト聞キ人心自ラ恟々タリ」

慶応三年末の事件は、翌年正月元旦の小田原の朝を、大火と戒厳令下におき、まさに小田原戊辰戦争の始まりと「小田原が暗転する日」を予兆させる出来事と言えよう。

おわりに

一時でも佐幕派に属した小田原藩や藩主自らが遊撃隊に加わった請西藩では、維新後戊辰戦争については殆ど口を閉ざしたと言われている。

小田原市立図書館蔵『慶應戊辰小田原戦役史』（村岡尚功編・大正八年刊）によると、これまで記してきた埋葬ヶ所の他に、小田原の桃源寺・誓願寺・新光明寺・光圓寺・養託寺・蓮上院・高長寺・常泉寺に箱根の本還寺などに、戊辰戦争の殉難墓が記されている。

この中に、首級と胴体が別の寺院に埋葬されている記述もある。首実検のためである。まだまだ知られていないことが多々あるのだろう。

廣部氏は「平成十一年に来たときは、箱根町役場などを訊ねたが、芦川の墓が判明せず諦めて帰ったが、今回、『小田原史談』の縁で、明治維新から数えると、実に百三十八年目の邂逅になる。石井さんと電話連絡が取れてから、嫁入り後、何年も孫に恵まれなかった私たちに、娘から懐妊の知らせもあった。これも曾祖父の墓が知れたからではないか」とも言われていた。

また、県道湯河原箱根仙石原線の藤木川に「広部橋」が架かっている。

この橋名の由来は、湯河原町民にも全く知られていないようである。

箱根戊辰戦争と「廣部与惣治」の由縁であるらしい。次回に発表できれば、と現在、調査中である。

新会員

露木　順一　開成町牛島八三
吉田　能登　小田原市中町一―八―五　TEL　二四―〇〇六六
三元　良紀　小田原市飯田岡二二四―一　TEL　三六―一三七九
鈴木三智子　小田原市南町三―一―二五　TEL　二二―八七九三
佐藤　道子　小田原市板橋一八五―一　TEL　二二―〇九一二
中里　千鶴　小田原市北ノ窪五一六―一二　TEL　三四―五四一五
早見　芳枝　湯河原町鍛冶屋七四二―一六　TEL　六三―五一二〇
石口健次郎　南足柄市関本二二九―一三　TEL　七二―一二八五
中村　和子　小田原市本町一―三―一八　TEL　二二―三八三八

訃報

林　絹枝　氏
小田原市栢山二八五五―四―一〇一
平成十七年十一月ご逝去。

本場　敬三　氏
小田原市曽我谷津四〇〇
平成十七年十二月二十六日ご逝去。

大田　幾喜　氏
小田原市清水新田一五六
平成十八年一月二十日ご逝去。

西山　辰三　氏
小田原市曽我岸五
平成十八年三月十八日ご逝去。

市川　静子　氏
小田原市南町三―一〇―一七
平成十八年四月ご逝去。

謹んでお悔やみ申しあげます。

長門の浦

高田掬泉

〝道は六百八十里、長門の浦を船出して〟

これは私が幼かった頃流行した明治の軍歌であるが、私はこの長門の浦に復員帰国の第一歩を印したのである。昭和二十一年四月十二日朝、私達帰還兵と北支からの帰還邦人千数百名は、夢にまで見た懐しの祖国のこの〝長門の浦〟へ到着したのである。歌に唱われた長門の浦は当時既に仙崎港と呼ばれていた。終戦当時北支に在留した日本人は何万名であったか知る由もないが、引揚業務が始まってから彼らは天津の貨物廠に集結を命ぜられ、乗船の順番を根気よく、そして悲しい想いで待ち続けていた。同じく天津に集結して米軍の使役に狩り出されていた私達「恵兵団」の兵隊は、年令順に一ヶ中隊から七名づゝが引揚邦人の護衛の名目でLST要員（米軍の上陸用舟艇による日本人引揚業務）として選抜されて帰国の幸運を掴むことが出来た。

私達川北中隊の中で明治四十四年生れは十人程いた。この中、七人だけがこのLST要員になれる訳であった。裸か電球の薄暗い中隊長の居室でこれら十人の老児兵は籤を引いた。三人だけが帰国が延びる不運を引く訳であった。私は無感動に籤を引いた。いつもくじ運の悪い自分のことなので半ば諦めていたのが最後の七番目で選の中に入り、翌日早朝天津貨物廠へ向うことになったのである。

しかし貨物廠に入り何万とも知れぬ引揚邦人の家族達と同居した私達は一向に進歩しない乗船業務にいらいらし、毎日為すこともなく、たゞ広い貨物廠の中をウロウロと歩いた。大きな倉庫が何十棟と並び、その倉庫の中の床にアンペラ（アンペラ草で編んだむしろ）を敷きつめ、紐を張りめぐらしてそれぞれに毛布など掛けて部屋の仕切りとして、邦人達は雑然と寝起きしていた。モンペ姿の奥さん、国民服の父親、そして大勢の子供達。みんな冴えない顔色をして倉庫の外に出てうつろな眼を空に向けていた。私がこの貨物廠へ入ったのは漸く春がやって来ようとしていた三月二十七日であった。太陽の光が金粉のように空に漂っている下で邦人達は整理しきれない持ち物をうず高く積んで燃していた。永年使用していた寝具や調度品をこゝまで苦労して運んだのであろうが、乗船するには限られたものしか持参出来ない。まだまだ使用出来る毛布やら小箪笥、衣服などが黒煙りを上げて厭な臭いを発散させているのを見ると、何かやるせ無い想いが鼻の奥を抜けて行った。一と月も待たされたかと思う程待ちに待たされて漸く身体検査を受けることになった。襟首から臍の中までDDTを吹きこまれた兵隊は性病の検査までされねばならなかった。

四月六日の朝、天津の空は雲一つなく晴天が続いていた。今日は愈々乗船である。兵隊達はよろける程に荷物を背負って貨物廠の出口の広場へ向って走って行った。私も天津の日本租界で買ったリュックサックに、冬物の防寒襦袢（セーター）に防寒袴下（毛のモ、ヒキ）そして夏物の軍服ズボンを詰め、そして内地では貴重品であると噂される晒の敷布で大きな袋を作り、これに下給品をためこんだ砂糖や岩塩を容れ、更にこれも下給品の軍足に白米を詰め、又新しい編上靴を一足ぶちこんで、ウンウンする程の荷物にして背負った。勿論肩からは水筒をかけ、下げ鞄には携帯用の乾パンを入れて、まるで欲の固まりのようになって広場へ向った。

広場の柵の外の引込線には既に無蓋車が蜒々と連なってわれわれを待っていた。愈々これに乗って日本に帰れるのかとこの時になって私は初めてこの喜びの実感を味うことが出来た。貨車に乗る前にオーストラリア兵による物品検査が行はれた。赤ひげのオーストラリア兵は我々をまるで虫けらのように扱い、折角精魂こめて荷造りした帰国のお荷物を彼らの前で一応全部ひろげて見せねばならなかった。腕時計などはとられることもあるという噂があったので二の腕までたくし上げて見えないようにした。然し彼らは棒の先で私の荷物をチョット突いただけで簡単に終った。だが乗車まであと五分と言はれたので、私達はひろげた荷物を再びまるで夕立に遭ったとりいれのように、あわてふためいてリュックに詰めて柵の外の無蓋車へ向って走り、しがみつくようにしてドアーをよじ登り貨車の中へ転がりこんだ。貨車の中は兵隊のひげ面といっぱいの荷物で足の踏み場もない。みんな浮き浮きしていた。これでいよいよ帰れるのだ！家族のみんなの顔が胸の中を去来する。然し誰もそれ

を口に出して言うものはいなかった。鎌倉の自宅へ帰ると言う吉田上等兵が昨夜の祝い酒の宿酔いで蒼い顔をしているのを私は〝元気を出せよ、家へ帰れるんぢゃないか〟と励まして、私自身も胸が躍るのであった。列車は中国の機関車特有の物々しい蒸気音をひゞかせて乗船地塘古へと走り出した。

塘古の港の空は明るかった。匂うような海風の向うに、塩田の風車が緩くまわっている。ジャンクの帆を張ったような大きな風車である。大陸を転々としていて暫く海を見なかった私は、久し振りに臭ぐ潮の匂いに胸も晴ればれとし、この海が日本の港に通じていることに強い感銘を覚えた。港は列車の止った前方五十米にあった。そしてそこに我々が乗船する上陸用舟艇が、その灰色の巨体を横たえていた。上陸用舟艇といっても船腹に戦車を十数台収納して、接岸すれば船尾が大きく口を開けて、開いたドアが橋板となって戦車が次々と上陸するあの上陸用舟艇である。船はアメリカの船であるが、乗務員は全部日本人である。タラップを昇った我々兵隊はLST要員として邦人達とは別の船室に入ることになった。

甲板から小さい梯子で降りると狭い船室の両側に二段にハンモックが吊ってある。このハンモックが私達の寝床である。私は嘗って渡支した時の、あの馬来丸のすしづめ船室を思い起こし、こんなに清潔で明るい船室に寝起きして帰国出来ることを感謝したい気持ちであった。船室での一応の整理を終え、甲板に出てみる。だゞっ広い甲板には今乗船して来た邦人達が五十人位かたまっていたが、やがて船底から響いてくるエンヂンの音と共に、甲板もろとも静かに船底へ下降して行った。これは戦車を運搬する為めの装置らしいがボカッと開いた船倉を覗いてみると、倉庫のように広い船倉には既に邦人達が色とりどりにざわめいていた。この船に乗った邦人達は千五百名もいたであろうか。小さい子供を背負った女や、小学生位の男の子の手をひいた父親、ものものしく美髭を蓄えた男、見すぼらしい服装をしたのや、対照的に華美なドレスを着こなした女。さまざまな階層を含んだ雑然たる集団であったが、いずれも故国へ帰れるという切実感から明るい雰囲気が満ち溢れていた。私達LST要員十数名は名目こそ引揚民の護衛ということになっていたが、別に兵器を持っている訳でもなく、彼らに号令をかけるでもなく、単なる仝じ同船の者という立場であったのが私には気楽でありがたかった。

船はやがて出航した。船が蹴り出してゆく水尾の先きに塘古の港が次第に小さくなってゆくのを私達は全員甲板に出て、いつまでもいつまでも立ちつくして眺めていた。二年前にアメリカの潜水艦に追われながら、救命胴衣を固く胸に締め、ヂグザグと渡った黄海を今度は一直線に故国めがけて船は走った。一直線に走っても私達は故国までの道のりをこの船内で二度の夜を迎えねばならなかった。四月十一日の午後、日本の島影が見えて来た。青緑色の島影である。全員甲板に出て船が進んでゆく前方に眼をこらしている。島影の緑はやがてはっきりと松林の姿となって立ち現われて来た。島と思ったのは湾曲して突き出ている岬の一部であった。単調な大陸の風景ばかり見て来た私達は、こんな色彩豊かで変化に富んだ山や海の姿を見て、日本はいゝなあと思わず呟いた。岬の先をクルリと廻ると港が見えて来た。街がある！　火の見櫓が見える！確かに日本の地である。船がスピードを落として尚も進むと、まわりの風景が私達を迎えるように取りかこんで来た。船はエンヂンを停めて錨をおろした。

然し私達はこの日、この港へ上陸することは出来なかった。出港地の塘古にコレラが発生したというニュースが入ったからである。出航日から勘定してコレラの潜伏期間が終る明日までのまる一日間は上陸の許可が下りないのである。私達は美しい夕陽に彩られた仙崎港の眺めを甲板の手摺りにもたれて飽かずに眺めていたのである。

折角祖国の地を目前にしながら上陸出来ないやるせなさをお互いに胸に抱いてハンモックに寝そべっている時、思いがけなく上陸の許可が下りたというニュースが飛びこんで来た。翌朝、四月十二日のことである。私達一同は歓声を挙げた。私達は甲板へ出てみた。既に甲板は引揚邦人達の喜びの声でいっぱいであった。船はいつの間にか岸壁に近く寄っていた。岸壁には紛うかたない日本人が多勢群ってこちらへ向けて手を振っている。朝の陽を受けて沢山の漁船が港を埋めていた。そして街の家々の白壁が、これこそ祖国日本の姿であることを象徴するかのように春風の中で輝いていた。午前十時、艀舟に乗り移って岸壁に着き、港の土を踏んだ

時、私はこれでいよいよ家へ帰れるのだという実感を全身で感じた。

僅か二ヶ年とはいえ、まるで異る風土と民族の中で過ごし、その上軍隊という特殊な環境で暮して来た違和感を、今、こゝでスッポリと脱ぎ捨てゝ、再び日本の市民としての生活に帰れることがどんなに嬉しいことか、それは筆舌に尽せるものではない。小砂利のゴロゴロする仙崎港の広場に集結した私達は、背負って来た荷物を一とまとめにして小休止となり、昂ぶった胸を静めることになった。私は船内で付けたポッダム兵長の肩章をこゝで毟りとった。兵隊は敗戦後みんな1階級づゝ昇進した。敗れて一階級進むことが何の意味もないことは分かっていたが、永年星一つの為めに散々苦労して来た兵隊達は折角呉れたこの空手形の肩章を、自分の軍服に縫い付けながら、空ろな喜びを笑い合ったのであった。これをポッダム兵長とかポッダム軍曹というのである。

広場の一隅には小さな事務所があり、此処の前に戦災地図というものが展示されていた。情報を得られなかった私達兵隊は、内地の空襲がどんなに激しいものかも皆目知らなかった。戦災地図には全国の空襲を受けた都市の焼失区域が赤斜線で印してあって、帰還者の為めに展示されていたのである。私は船内の邦人から小田原も戦災を受けて焼失したことを噂にきいたのだが、逸る心で戦災地図を引ったくると、小田原市のところをパラパラめくって探した。あった！大きく描かれた小田原市の地図の中心部は無残にも赤斜線が大きな部面を占めていた。眼をこらし、指で明細に斜線を拾ってゆくと我が家のあたりも斜線が赤く蔽っていた。駄目かなと思った。そしてそれよりも家族の者たちの安否が急に不安になって来た。妻からの便りは北支を発って中支へ向う混乱の最中に最後の一通を受けとったきりである。あれから一年以上も経っている。今こゝで一人でも家族に異変があったならばと私は今までの呑気さに急に後悔が湧いて来た。然しそのような不安は現実に愈々わが家に帰れるという感動の蔭で直ぐに消えてしまった。

支給された懐かしい内地の折詰弁当の昼食を終るといよいよ仙崎駅へ向って出発であった。背負いきれない程の重いリュックと両手には毛布をつめた手製の鞄を下げて駅まで何キロあるのか、歩けるのかなと些か心配になっている時、仙崎女子青年会の襷をかけた娘たちが、手拭いでキリリと髪を包んで私達に手を差し出した。引揚兵奉仕の為に荷馬車を用意してあるから荷物を下ろしなさいと言う。これで重い荷物から逃れることが出来たという安堵感より、敗れて帰って来た兵隊に対する内地の人々の親愛感が全身に沁み渡って、私は思はず涙がにじんでくるのを防ぎようがなかった。荷馬車に背負って来た荷物を全部載せ、私はうしろからその荷物が落ちないように手を添えて駅まで歩いた。折柄、そよ風に散ってくる桜の花びらは荷馬車の上にも降りかゝり、軽く汗ばんだ私の首筋のあたりにもハラハラと落ちて来た。

仙崎駅は古ぼけた小さい駅であった。駅前に整列した帰還兵はこゝで輸送指揮官から解放の挨拶をきかせられた。これで愈々正真正銘の自由の身である。身も心も解き放されて身体がふわふわと浮くようであった。帰還兵は汽車も無料であるとのこと、夕食用にと駅弁一箇づゝを渡されて私達は解散した。然し船内で渡された一人二百円宛の紙幣はそのまゝでは使用出来なかった。証紙と称する小さな紙片を二十枚渡され、十円札にこれを一枚づゝ貼らなければ使用出来ないとのこと、何のことやら分からなかったが、数人に一個の割合で渡された糊の小びんを奪い合うようにして、路傍にしゃがみこんでこの証紙の貼付作業に苦労しなければならなかった。午後からやって来た春の突風に、証紙をとばされまいと両手で十円札を押えての難作業も夢中の中に終了した。この新円と称する十円札二十枚を懐中にして私は街をぶらついてみた。酒の好きな奴は酒屋へはいっていった。私は小さい八百屋の前に停った。子供への土産にもと思って並んでいる夏みかんを手にとってみた。然し一ヶ二十円と聞いて私は躊躇した。中国でのインフレも大したものであったが、こうして限られた二百円しか在中していない財布は、勘定しながら使はなければ家に帰るまでに空らになってしまうのではないか。私は家族達の生活がどんなになっているのか、おぼろげながら心配になって来た。

短いホームに到着した下関行列車に乗りこんだ私は、そこにいっぱい溢れる程に詰めこまれた祖国の人達がかもし出す雰囲気の中に、久しく忘れていた市民生活の息遣いを感じてホントに故国に帰って来た実感を再び噛みしめていた。

〝兵隊さんは何処からお帰りかね〟

傍の座席に坐っていた老婆から話しかけられて私はもうすっかり兵隊の気分を失っていた。物凄い満員の車中に、私はリュックを下ろしてその上に腰をかけて車窓の外を覗きこむようにして見た。車窓はガラスが全部破れて海岸から吹きこむ潮風が容赦なく乗客の顔に吹きつけた。このガラスは朝鮮人が割ったのだとその老婆は話したが、私には何故そのようなことになったかと判然とも分からず、唯々戦いに敗れた故国の惨めさを改めて思いみるのみだった。

それでも汽車は快適に走った。海岸線をめぐって走ってゆくと、目の先きの海中に船のマストが突っ立っている。初めはどうしたのかと不審に思って走り去ったその奇妙な風景を振りかえっていると、そのような海中の光景が三っも四っも走って来た。船の煙筒が半分も海面に出ているのもある。私は思わず胸の中に撃沈される日本の商船の姿が浮かび出て来た。そしてこんなに陸地近い処まで敵の攻撃が行はれたことに深い嘆息をつき、この事実を車中の誰かに訊ねて確認する勇気を失った。

下ノ関には暮れなづむ春の暮色が、深くなる頃到着した。ホームに降り立った時私は既に兵隊ではなく、往ったり来たりする乗客の中に混って単なる一人の旅行者となっていた。

重い背中の荷物を揺り上げながらホームから下ノ関駅の待合室へ出ると其所は完全に日本の都市の一部であった。待合室に雑踏する人々をかき分け駅前に出た私は、対岸の門司の街の灯がチラチラ瞬くのを暫らく眺めていた。然しふと妻子のことを思い起こして、この今日の内地帰還を速く知らせてやりたいと思い電報を打つことを思いついた。再び待合室に入って電報室を探した私は、何とか今夜着くでしょうと言う係員の頼りない返事を不安に思いながらも、固い板製のベンチの上で頼信紙に刻みつけるようにして〝ブジツイタアスカヘルキクゾウ〟と書きつけた。これを受けとる妻の顔がアリアリと目の裏に浮んだ。

電報を打って落ち着いた私は、待合室の椅子に腰を下ろして夕食の折詰弁当を開いた。東京行急行列車は九時過ぎでなければ発車しないからそれまでには大分時間がある訳である。薄暗い待合室の中は相も変らず混み合っていた。三和土（たたき）に下ろした大きなリュックに片脚を乗せ上げながら弁当をパクついていると、傍らからヌッと子供が顔を出して膝の上の弁当を覗きこんだ。私は無言で右に身をねじ向けた。するとその子供は私の背後をまわって肩越しに再び弁当を覗いている。私は突嗟に船中で聞いた戦災孤子だと気がつき、あたりを見廻してみると同じように疲れた服装をした男の子が四、五人、荷物を置くテーブルの上に寝そべったり、或いは大人達のうしろに蹤いて往ったり来たりしている。私は敗戦の惨めさをこの時初めて身に沁みて感じた。そしてこの食物欲しそうな子供の眼を見返して果たしてこの子に食べものを分けてやるべきか否かを考えて見た。然し私はこの子一人だけでない孤児達の姿を思い、ついにこの考えを実行する勇気を失い、やり切れない想いの中で無言でそゝくさと食事を終えた。

夜の待合室がこんなに混み合うのは単に列車を待つ人ばかりでなく、何の意味もなくうろうろと歩きまわる人が多いように見分けられる程に私の観察力も落ち着いて来たらしい。敗戦の虚無感から人々は唯々人々の中に出て彷徨（さまよ）っているのかも知れなかった。待合室の一隅の一段階段を上った処に食堂が開かれていた。こゝは待合室と違って電灯も明るく入口のウインドには色とりどりの料理が並べられていた。私はこの前に立ち止って腰をかゞめて久し振りに見る豪華な食べ物のパレードに見入った。天丼、親子丼、ライスカレー、綺麗に飾られたこの料理たちは今、夕食をすませたばかりの食欲を再び掻き立てたようであった。先刻の戦災孤児の無気味な瞳も忘れて、一つ帰還の思い出に食べて見たいと思った。然し値段を見て私はこの念願をあきらめねばならなかった。僅か二百円の嚢（のう）中では一杯八十円もする天丼は考えざるを得ないだ。戦前の五十銭か八十銭の天丼が頭を去っていない私にはまさに高嶺の花であった。だがその時にはインフレの怖ろしさを実感としては感ぜず、胸勘定しながら立ちつくしていただけであった。

午後十時近く発車した急行は明日の夜まで一昼夜かゝって小田原へ到着する予定であった。満員の車中に無理矢理押しこまれた私は、勿論座席に坐ることも出来ず、大きなリュックを床に下ろしてそれに倚りかゝって立ったまゝ眠りについた。それこそトイレの中まで乗客が溢れ、身動きも出来ないまゝに夜汽車の一夜を明かした。車窓が

漸く明るみ始めたのは姫路あたりを過ぎてからであろうか。焼け跡の野っ原の向うに小松林が見えて銀ねずみ色の海の遠くに淡路島らしい大きな島影が浮かんでいるこのあたりはおそらく須磨、明石の名勝地なのであろうに、このように人家もなく荒廃しきった瓦礫の曠野の姿に私は、内地の戦災の激しさを今更のように思い知らされた。然しそれから更に過ぎて神戸まで来た時、車窓に展開される空襲の爪跡の無残さに息をのむ想いで私は目をこらした。遥か彼方、六甲山の麓まで一望千里の焼野原である。僅かに影をとゞめている樹木も大半は焼けぼっくいの林立であり、かっては市民達の生活の城であった住居は無残に白い敷石を残して、るいるいと目の届く限り空ろな骸を春の陽光にさらしているのである。然し私の暗然とした感慨も長くは続かなかった。こうした戦禍の地を乗り越えて私は一路ふるさと小田原へ向って現実に走り抜いているのである。戦争が終ったことに限り無い安堵を覚え、再びこの手に戻ってくるであろう幸福をしっかり胸に秘めて、私はこの無残な戦災地の有様を静かな気持で見送ることに何の躊躇もなかった。

ふと前の乗客が膝に拡げたタブロイド版の新聞紙に、総選挙の開票結果が賑々しく載っている。帰国早々の私には選挙のことも何も分っていない。唯、婦人候補者が大量に当選してその顔写真がずらりと並んでいるのを盗み見て、故国の政治情勢が大きく変っていることをボンヤリ考えていたのである。やがて再び夕暮れを迎え、街の灯のチラチラする沼津まで来ると、懐しい箱根連山が暮れゆく東の空に黒く長く横たわっているのが目に入る。更に丹那トンネルを抜けて熱海の灯が見えた時、私はやっと帰れたという感慨に襲われて胸が躍るのである。更に早川の鉄橋を渡り十字町のガードを渡る時、わが小田原は少しも変らない姿で待っていて呉れた。ガード下から緩(ゆる)いカーブで東に走っている街並みは灯りこそ乏しかったが、私が住んでいた時のまゝの姿である。私は思はず滲み出た泪をこぶしで拭った。

午後八時過ぎ列車は遂に小田原駅に停った。ホームには人々が一っぱい群れ集っていた。身動きも出来ない程混み合った車中から出口に向って必死に身体をよぢらせている時、車窓を激しく叩く音がし、振り向いた眼の先きに父の引きつったような顔があった。車窓の傍に坐っていた男が事情が分ったのか、いきなり窓を引き上げて呉れた。父は何か喋(しゃべ)っているらしいが、私は手にしていた大きな荷物をその窓からホームへ押し出し、そして私自身も車窓を潜り出てやっとホームに降り立った。遂に私はふる里へ帰ったのである。父が持って来た自転車の荷台に荷物を載せて我が家へと辿る道は、強制疎開で空虚になった暗い通りもあったが、殆んど私が出発した時と変らない故郷の姿であった。

父から取りあえず家族みんなの無事を聞かされ、隣りまで来た戦火も我が家で止ったことを知らされて私はやれやれと胸を鎮めた。暗い国道の先きに我が家が見えて来た時、妻は息せき切って走って来て私に飛びついた。声はなかった。私は些かテレながらも妻の身体を抱きしめ髪の匂いをかいだのである。

（昭和四十六年十月）

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝

夏つばめ朝市通り低く翔ぶ

ある年の六月初め、友人と北陸の旅を楽しんだ。和倉温泉に一泊、丁度能登のキリコ祭で夜の海岸は賑わっていた。神輿に供奉する切子灯籠を大勢の若者が担ぎ、その勇壮な動きが力強い掛け声とマッチしてそれは素晴しかった。翌朝は輪島の朝市通りをぶらぶら一時間ほど見物出来た。露店の小母さん達の元気な顔と売り声は、朝市ならではの光景だった。そのあと、能登金剛の大小の岩礁が散らばる断崖絶壁が続く景勝地を、遊覧船に揺られ日本海の涼風が肌に心地よく、なんとも幸せな気分だった。夏の訪れと共に能登の旅は忘れられない思い出である。

明治時代、足柄上郡の名士など（1）

中村静夫

明治三十三年（一九〇〇）発刊の『神奈川文庫第五集』の「百家名鑑」から、「小田原の商家」に続いて、「足柄下郡の名士など」を掲載してきました。今回からは、「足柄上郡の名士など」を紹介します。

下に明治三十三年当時の足柄上郡の村名地図を示しました。総計二十六ヶ村になりますが、上郡以外の人たちには馴染みの薄い村名もあろうかと思います。

天保十年（一八三九）の史料とされる『新編相模国風土記稿』によると、江戸時代は九十五ヶ村を数えます。

明治維新からの統合や合併を経て、同二十二年（一八八九）の町村制施行により、六十九ヶ所の村名が失われたことになるのでしょう。

これらの地域は、現在では南足柄市と松田・山北・開成・大井各町の一市四町を中心に、静岡県や小田原市・秦野市・中井町・箱根町の一部に組み込まれています。小字名として残存しているところもあるでしょう。

今回は、その内の中村から三十六名・曽我村四十名・金田村十七名・松田村十六名・上秦野村十六名の五村百二十五名を紹介します。

足柄上郡中村

足柄上郡中村字境
●農業　石井莊五郎

同郡同村字北田
●農業　市川七三

同郡同村字境宗玄寺住職
●僧　西島門量

同郡同村字藤澤清岩寺住職
●僧　大久保豐嚴

同郡同村字北田
●農業　大澤德次郎

曾我村

同郡同村字境一六九〇
●教員　押田太三郎　號不賢
八千代迄根さして菊の盛り哉

同郡同村字岩倉
●農業　大川杢右衛門

同郡同村字古怒田
●農業　小島清五郎

同郡同村字雜色
●農業　小澤綱吉

同郡同村字岩倉
●農業　加藤理五兵衛

同郡同村字遠藤
●農業　金子梅太郎

同郡同村字岩倉
●農業　加藤宗吉

同郡同村字鴨澤大泉寺住職
●僧　加藤宗芳

同郡同村字八所
●農業　加藤彌太郎

同郡同村字岩倉
●農業　加藤文次郎

同郡同村字田中
●農業　金子久治郎

同郡同村字田中
●農業　金子茂三郎

同郡同村字遠藤
●酒類製造　田島清吉

同郡同村字半分形
●教員　内藤茂平治　號しげり
ふき送る風のまに〳〵青柳の
いと永き日をくり返しみん

同郡同村字松本
●農業　上原德次郎

同郡同村字鴨澤
●煙草製造業　野地圓左衛門

同郡同村泰翁寺住職
●僧　曲淵白鳳

同郡同村字松本
●教員　小林千代吉

同郡同村字松本
●農業　小沼吉兵衛

同郡同村字比奈窪
●農業　權守元次郎

同郡同村字北田
●農業　榎本保治

同郡同村字八所
●農業　相原惠佐

同郡同村字半分形
●農業　篠島伊代七

同郡同村字雜色
●煙草製造營業　城所市郎右衛門

同郡同村字雜色
●酒類製造　城所富造

同郡同村字比奈窪
●農業　城所林造

同郡同村比奈窪八一
●農、商業　城所米吉

同郡同村字雜色
●農業　城所瀧三郎

同郡同村字比奈窪
●農業　城所茂左衛門

同郡同村字松本
●農業　關野由五郎

同郡同村字鴨澤
●農業　須藤米三郎

足柄上郡曾我村字上曾我一九六三
●農業　稲毛德太郎

同郡同村字大井九五四
●商業、酒造業　石井柳兵衛

同郡同村字大澤八五赤十字社員
●醫師　石井音次郎

同郡同村字大井三四五
●商業、酒造營業　井上勝藏

同郡同村字大澤一九八
●農業　石井爲次郎

同郡同村字上大井五一〇
●商業、醬油製造營業　石井太四郎

同郡同村字上大井五五二赤十字社員
●商業、酒造業　井下定次郎

同郡同村字西大井三七四赤十字社員
●農業　井上勇次郎

同郡同村字鬼柳九〇赤十字社員
●農業　市川峰吉

同郡同村字西大井四四赤十字社員
●農業　岡部清右衛門

同郡同村字大澤一一八
●商業、油製造營業　早野澄造

同郡同村字上大井五六五
●農業　平田銀兵衛

同郡同村字曾我四〇八
●農業　德田繁次郎

同郡同村字上大井赤十字社員
●神道教師　奥津長太郎

同郡同村字下大井一六五赤十字社員
●農業　小澤幸助

同郡同村字下大井一九八赤十字社員
●商業、酒造營業　和田利三郎

同郡同村字上曾我一三一赤十字社員
●農業　柏木十九五郎

同郡同村字上曾我五九赤十字社員
●農業　柏木惣五郎

同郡同村字大井三七五
●神官　加藤廣光

同郡同村字西大井眞福寺住職
●僧　川崎慈範

同郡同村字上曾我八七四赤十字社員
●農業　柏木仲次郎

同郡同村七八
●農業、糸繭、烟草仲買商　代田竹次郎

同郡同村上大井六一一
●農業　高田又三郎

同郡同村字上大井五六九
●商業、糸繭仲買、呉服、荒物販賣商　根岸利八

同郡同村字上大井赤十字社員
●農業　根岸幸次郎

同郡同村字上大井大通寺住職
●僧　中津清定

同郡同村
●旅人宿　綿屋植木要藏

同郡同村字下大井一八五赤十字社員
●農業　久保寺　豐太郎

同郡同村字下大井二二一赤十字社員
●農業　久保寺　悅之助

同郡同村字上大井九三七
●農業　矢島　仙太郎

同郡同村字上曽我一〇〇八赤十字社員
●農業　小坂部　松五郎

同郡同村字鬼柳三一一赤十字社員
●農業　水野　利八

同郡同村字大井五七六
●農業　石田　廣吉

同郡同村字曽我大澤二〇二
●商業、油製造業　澁谷　初五郎

同郡同村字上大井五四五
●農業　澁谷　儀三郎

同郡同村字上大井五七九赤十字社員
●農業　平野　利太郎

同郡同村字上大井六〇六
●農業、煙草、小間物商業　平野　彦兵衛

同郡同村字上曽我七四八
●酒造業　杉坂　彌三郎

同郡同村字鬼柳五九赤十字社員
●農業　杉田　佐久造

同郡同村字鬼柳一九赤十字社員
●農業　杉崎　喜代藏

金田村

足柄上郡金田村字金子一〇八五

島田　飯山　鶴次郎
●醤油製造營業

同郡同村
●教員　伊谷　政行

同郡同村字金子二七六四赤十字社員
橋本　齊吉
●農業　醤油製造營業

同郡同村字新宿一一六三
●農業　小野　金太郎

同郡同村字金子一九一一圓藏院住職
●教導職　寶田　德雄

同郡同村字金子二八〇六
●農業　田村　豐三郎

同郡同村字根岸金子二九八八
●煙草製造業　高橋　竹次郎

同郡同村字金子二九〇〇
●商業、煙草製造營業　高橋　常七

同郡同村字新宿金子一一六四
●農業　綱島　彌太郎

同郡同村二九八七
●教員　長坂　邨太郎

同郡同村字金子九二三三
●製糸業　牧野　仁三郎

同郡同村二九三九
●農業　間宮　玉三郎

同郡同村字金子二五四〇
●農業　間壁　唯治

同郡同村字金子一〇六三島院住職
●教導職　藤川　弘道

同郡同村
●農業　渥美　常三郎

同郡同村一一〇八
●教員　北村　三郎左衛門

同郡同村字根岸金子二八六二
●農業　清水　倉次郎

松田村

足柄上郡松田村字神山六五五

鶴岡商店　長谷川　彦藏
●煙草製造販賣業

同郡同村字神山一五九
●農業　橋本　爲名

同郡同村字松田總領一一九四松田郵便局長
●農業　鍵和田　憲甫

同郡同村字惣領一二二
菓子半店　竹内　半平
●呉服、荒物商

同郡同村字神山一四三
●農業　田中　房太郎

同郡同村字松田總領一八二〇
●農業　中村　智尊

同郡同村字松田總領二〇四〇
●農業　中村　直次郎

同郡同村字松田總領一八八八
醤油屋　中村　傳吉
●醤油釀造業

同郡同村
●農業　中村　規矩平

同郡同村字松田庶子七九一
●農業　松島　澤三郎

同郡同村字松田總領
●曹洞宗教會　延命寺

同郡同村字松田庶子足柄上郡長
●官吏　荒木　義諦

同郡同村七〇六
●農業　北村　太郎吉

同郡同村五九〇
●煙草卸賣　北村　崎太郎

同郡同村字神山六三四
●農業　北村　岩吉

同郡同村字神山九六
●農業　北村　助之烝

上秦野村

足柄上郡上秦野村字三廻部

井上　太郎
●煙草仲買製造營業、肥料商

同郡同村字三廻部
●商業、酒類製造　井上　安太郎

同郡同村字柳川
●農　和田　庄之助

同郡同村字八澤
●農　吉岡　市之丞　號壽山

○葉煙草秦野ハ明治廿三年帝國勸業博覽會ニ出品褒賞拜受

同郡同村字八澤宗淵寺住職
●宗教師　武井　亮光

同郡同村字柳川
●農業　熊澤　好太郎

同郡同村字柳川
●商業、酒造營業　熊澤　保之

同郡同村字柳川
●農　熊澤　又造

同郡同村字菖蒲淨德院住職
●僧　黑田　靈雲

同郡同村字柳川
●教員　熊澤　清次郎

同郡同村字菖蒲
●葉煙草仲買　府川　稻吉

○葉煙草秦野ハ明治廿三年第三回帝國勸業博覽會ニ出品有效三等賞ヲ拜受ス

同郡同村
●煙草仲買　府川　仁三郎

同郡同村字菖蒲
●農業　府川　若太郎

同郡同村字柳川
●農　守屋　森右衛門

同郡同村字菖蒲
●農　須藤　伊助

同郡同村字菖蒲
●農業　須藤　元治郎

（編集　石井啓文）

二宮尊徳先生並びに それに続く者の大志と実践

井上成一

小田原市の二宮尊徳記念館の場所は、今から二百十九年前の天明七年（一七八七年）七月二十三日（旧暦）に先生が誕生されました聖地であります。

先生は、この地に三十六年間に亘り在住され、その後小田原藩主大久保眞公の再三に亘る懇請により藩の別領地（藩主の分家である宇津釟之助の所領）である野州櫻町（栃木県二宮町）の荒廃地の復興を十年間で完成をする事を藩主と約束した上で、現地に赴くのであります。

先生のそれ迄の状況は十四歳で父親を亡くし、十六歳の時には今度は母親を亡くし、更にその年には酒匂川の上流の堤防が破れて洪水となり先祖伝来の田畑が流出して砂礫と化する悲惨な事態となり、止むなく先生は弟二人を母親の里に預け、自分は伯父の万兵衛宅に身を寄せて働くという、完全に二宮家は一家離散した状況となりました。然し先生はその後それに屈する事なく猛然と奮闘努力された結果、三十一歳の時には三町八反余（約三・八ヘクタール）に達する立派な自作農となるのであります。然し櫻町復興に際しては「妻子を伴い現地に赴く様に」との藩命でありました。先生はその時非常に困惑したのでありましたが、「一家を廃し万家を興す」との決意の下にそれ迄の田畑家屋敷家財を全部処分し、それを櫻町復興資金として妻子を伴い現地に赴任するのであります。その時先生三十七歳、文政六年（一八二三年）の事であります。

時移りまして明治の時代になりまして、皆さんが良く御存知の世界の真珠王であります御木本幸吉翁が青年時代に日光東照宮を参拝した折に、今市近郊（二宮尊徳先生のお墓があります）で先生の偉大な遺業を知り大変感動し、「先生が陸でやった事を海で実践するぞ。」と発奮し大志を抱かれたのであります。それからというもの翁三十二歳、明治二十三年（一八九〇年）の時に三重県神明浦に真珠貝培養所を起こした処、その二年後には赤潮が大発生し母貝が全滅してしまう被害を受けたのですが、翁夫妻は屈する事なくその翌年翁三十五歳、明治二十六年七月十一日に八十五万個の母貝からたったの五粒の半円真珠を世界で初めて発見し養殖真珠に成功するのであります。更にその後発明研究の結果、遂に翁四十七歳明治三十八年（一九〇五年）になって真円真珠が完成したのであります。三重県鳥羽市のミキモト真珠島の翁の記念館には尊徳コーナーが設けられ、先生の偉大さを顕彰しております。

翁は尊徳生誕地が人知れず荒廃しているのを大変憂えられ、明治四十二年（一九〇九年）全部買収・整備されそれを中央報徳会に寄贈され第二次世界大戦後にこれを小田原市が管理しこれが現在の報徳記念館の地であります。

翁のこの養殖真珠を米国の発明王エジソンは、「私の発明で出来なかった事は真珠とダイヤモンドであり、これを完成した事は大変素晴らしい事だ。」と絶賛されたのでありまして、第二次大戦直後の日本の産業が全滅状態で外貨の獲得の対象物がこの真珠と生糸だけであった事実を知る時、私達はこの偉業を忘れる事は出来ません。

又現在のトヨタ自動車を中核としたグループの業祖である豊田佐吉翁も報徳の熱心な推進者であり、地元で報徳社を創設した父伊吉翁の強い影響を受け人格形成は勿論の事、先生の数々のハードにおける創意工夫にならい我が国の産業革命を先導した繊維産業の先端をゆく繊維機械の分野で次々と発明をした結果は発明特許、実用新案を含め百十九件を記録し、その最先端高性能の機械は世界の繊維機械の本場である英国の名門企業であるプラット・ブラザーズ社を驚かせ同社の懇望によって特許権を十万ポンドで譲渡したのであります。翁は明治末年、外遊先の米国で自動車産業の素晴らしさとその研究開発に巨額の投資を行なっている実情を見て、晩年翁は長男喜一郎氏に対して「国への恩返しに私は繊維機械で尽くしたが、お前は次の時代に飛躍が予想される自動車で国の為に尽くせ。」と言い聞かせ特許料十万ポンドをすべて自動車の開発資金に投入した結果が現在のトヨタ自動車となるのです。

現在のトヨタ自動車の根幹となる社風は先生の実践に基づく佐吉翁の信念であります。即ち次の様になるのではないでしょうか。

一、自動車という分野を通して「社会、国家の恩に報いる」

という根本理念を堅持する。

一、「実利主義」ではあるが「利己主義」ではなく、「至誠と情熱」で先生の云われる推譲を生かす。

一、受難に直面しても屈せず、成功しても驕らず、「一身の他に味方なし」との「自立心」即ち他人の資本に頼らず、「ソフトでもハードでも合理化を徹底して無駄と生産過剰を省き」、先生の云われる勤労と分度の教えに従い、「自己資本の蓄積を重ね」、如何なる事態にも「不敗の態勢」を築く。

一、「現場主義」に徹し、「先ず物を見よ」「先ず体を動かせ」、そして「創意工夫」をせよ。

一、「人間性を重視」し、「科学的管理」を図れ。

二宮尊徳像

そして御木本翁と豊田翁は生前御互いに相識昵懇の間柄であります。「正に類は友を呼ぶ」の通りであります。

先生は安政三年（一八五六年）十月二十日に今市で七十歳の生涯を終えられたのですが、生前に直接の教えを受けた人が約千三百人いてその中で特に陣屋に同居を許された門人が約八十人といわれていますが、その中の富田高慶は最高の弟子といわれています。然し彼が入門する前後の状況が極めて面白いと申しますか奇しき縁でありました。

富田高慶は文化十一年（一八一四年）に当時相馬藩（今の福島県相馬市）の藩士の子として生まれ、当時の相馬藩は財政が窮迫していて藩士の生活も大変困窮していた状況でありました。彼が十七歳の時になんとかして藩の財政再建策を考えのでした。先ずその為には江戸に出て儒学を勉強しようと考え江戸に行った処、そこで町医者から櫻町の二宮尊徳先生の話を聞き、これこそ自分が今求めている師であると考えて先生の居宅を訪ねるのであります。富田、この時二十六歳で天保十年（一八三九年）であります。先生は玄関で富田を見るなり言下に断わり門前払いをするのですが、富田はこれに屈する事なく近所の子に儒学を教えながら食い継いで四ヶ月間も粘りに粘り、遂に入門を許されるのであります。先生は五十三歳でありました。

先生はその時、「よろしい、それではこれから直ぐ裏庭の縁側に廻りなさい。」と富田に指示されたのです。富田が縁側に廻りますとそこに二枚の半紙と硯と墨と筆がありました。先生は富田に「その紙の一枚に大きく豆という字を書きなさい。」と指示した。富田は不審に思ったのですが、先生の云う通り豆を書き上げた処、先生はもう一枚の紙の上に先生の袂から実物の豆を一握り取り出して置かれると同時に、両手でポンポンと叩き大声で、「先生を直ぐ此処に連れて来なさい。」と叫んだのです。下男が「ハーイ。」と返事をしました。この時富田はこの世の中に先生の又先生がいるのかと不審に思っていました処、「パカパカ」と蹄の音が聞えるではないですか、そして馬が先生の前に現れて止まりました。先生は、「先生、どうか豆を食べて下さい。」と云われますと、馬は富田の書いた豆という字の紙には一顧だにせず、直ぐ隣りの先生の置かれた実際の豆を美味しそうに食べたのです。

この光景を富田は一部始終見ていて、強烈な感動が頭の頂点から爪先まで走るのを覚えたのです。これこそ先生は青二才の自分に「これからお前は此処で実践学を徹底的に学びなさい。」との尊い教訓を与えてくださったと直感したのであります。それからというものは富田は先生が驚く程の勉強と修練を積み重ねていったのです。先生も彼を大変信頼し、後に先生の愛する娘文子との結婚を許すのです。

富田は先生の生存中に先生の言葉を詳細に書き留め、先生の没後一ヶ月後の安政三年（一八五六年）十一月に「報徳記」を著したのです。この「報徳記」は明治十三年（一八八〇年）十月に明治天皇へ富田の元藩主であった相馬充胤子爵により献上されたのですが、天皇はこの本により先生の偉大さに大変感銘を受けられ、勅命によって明治十六年宮内省より出版させ全国の知事以上の方々に配布されたのです。更に明治十八年には農商務省より同じく出版され、又、明治二十三年に大日本農会版として一般に普及される様になったのです。

先生の没後においてもこの様にその時代、時代で多くの方々に大変な感銘を与え、それが夫々の発奮の起爆剤となり大志を抱かせ社会、日本の発展の為に貢献されたのです。

江戸時代の小田原地方の酒

15年度総会講演資料から

瀬戸崎雄

日本において酒とは何だ

酒税法第2条

この法律において「酒類」とは、アルコール分一度以上の飲料（薄めてアルコール分一度以上の飲料とすることのできるもの（アルコール分が九十度以上のアルコールのうち、第七条第一項の規定による酒類の製造免許を受けた者が酒類の原料としてその免許を受けた製造場において製造するもの以外のものを除く。）又は溶解してアルコール分一度以上の飲料とすることのできる粉末状のものを含む。）をいう。

2　酒類は、清酒、合成清酒、しょうちゅう、みりん、ビール、果実酒類、ウヰスキー類、スピリッツ類、リキュール類及び雑酒の十種類に分類する。

清酒とは

イ　米、米こうじ及び水を原料として発酵させて、こしたもの

ロ　米、水及び清酒かす、米こうじその他政令で定める物品を原料として醗酵させて、こしたもの

世界の酒の原材料

その国の農産物の中で、安価・豊富で容易に入手出来る物。

ドイツ：大麦…ビール

フランス：葡萄…ワイン・ブランデー

イギリス：大麦…スコッチウイスキー

ロシヤ・北欧：馬鈴薯・各種の麦…ウオッカ

アメリカ：とうもろこし…バーボンウヰスキー

中国：小麦ともち米…紹興酒。

高粱…白酒

西インド諸島ほか・・さとうきび…ラム

メキシコ：龍舌蘭…テキーラ

日本：酒・焼酎・みりん

酒の製造を知らない民族

(イ)北極圏のイヌイット…耕地がない。

(ロ)ニューギニヤの高地人…食物の貯蔵をしない、醗酵容器がない

文献に見る日本の酒の最初

『魏志』「倭人伝」（『三国志』「魏書東夷伝倭人條」）三世紀前半

始死停喪十余日、当時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲食（中略）父子男女無別、人性嗜酒（後略）

初め死するや停喪十余日、時に当たりて肉を食わず、喪主こくきゅうし、他人就ひて歌舞飲食す（中略）父子男女別無し、人の性酒を嗜む

日本書紀

神代上第八段

汝可以衆菓醸酒八甕（いましあまたのこのみを以って酒やはらをかめ）

神代下第九段

時に神吾田鹿葦津姫（かむあたかしつひめ）卜定田（うらへた）を以って、號けて狭名田（さなだ）といふ。その田の稲を以って、天甜酒（あめのたむさけ）を醸（かみて嘗（にいなへ）す。

小田原最初の酒

北条氏印判状　天正十八年（一五九〇）三月廿五日　千津島

人足一人□　□熱海白井所□

□韮山ノ江川前より大樽請取、則小田原迄可持参、上下二日の扶持銭被下也、仍如件

追て、小田原より樽□□□遣候、以上

江戸時代

永代日記抜書　承応二年（一六五三）八月五日

Ⅰ　柴田や四郎兵衛酒能作り候に付、当年より御米二百俵御貸し可被成旨渡候事

酒造免許制度・酒株の設定　明暦三年（一六五七）

以後、酒株所持者に限り酒造りを許す

年代不詳・稲葉美濃守の時代

誠話採筆　巻の三　相州小田原諸白屋の事

元禄十年（一六九七）十月　第三次株改め

酒五割運上、小田原の酒屋大恐慌、翌十一年6月まである筈の酒が4月で売り切れ、手酒（自家用酒）が横行、街道の茶店で販売される。

元禄十年の酒道具所有表

村名	酒屋氏名	三尺桶	壷台	半切	酒糟	釜	甑
吉田島村	伝兵衛	1	1	3	1	1	1
成田村	安兵衛	1	2	2	1	1	
成田村	喜三郎	1	2	2	1	1	

明和年間（一七四六～一七七一）村の商人の盛行に小田原の問屋商人激怒

造り酒屋に就いては一行も無し。ご城下の酒造りはあきらめた。

天明八年（一七八八）酒造高調査

足柄上下酒造高上位10人

順位	村名	酒造人名	酒造高
1	池上	権左衛門	600,000
2	金井島	弥五右衛門	510,000
3	金井島	与五兵衛	345,000
4	松田総領	伝蔵	255,000
5	上曽我	和七	240,000
6	牛島	粂右衛門	225,000
7	和田河原	清左衛門	195,000
8	吉田島	源四郎	186,000
9	吉田島	紋兵衛	180,000
10	川村山北	常左衛門	180,000

関東大震災の片浦村米神あたり

植田博之

生前、母が話してくれた、怖かった話は、地震と戦争であった。

特に関東大震災の体験は何度も聞かされていたが、最近80歳ごろ、語り残してくれたテープを聴くことができた。

母が生れ育ったのは米神、半農半漁の静かな村であった。蜜柑山の手伝いに行くと、海のほうから海女さんの吹く磯笛がきこえたそうである。大正9年に開業した熱海線（国府津―小田原）が11年には真鶴まで延長し、米神の部落は土手の上に敷設された線路で海側と山側に分断されていた。

大正12年（1923）9月1日午前11時54分、13歳の母は始業式から帰った後、大勢の兄弟の昼食の後片付けの当番で台所に立っていた。

突然、砂埃がして立っていられなくなるほど土間が揺れ何が起こったかわからなかった。裏に出ると上の家の石垣が崩れ、建屋の姿はなかった。

祖父青木半右エ門は家族たちを率いながら、『みんなお宮さんに逃げろ』と近所に触れ回った。

大きな木が根を張った杜に囲まれたお宮さん（八幡神社）がもっとも安全と日頃から考えていたに違いない。

実家は海側にあり、お宮さんまでは近かったが、這うようにしてたどり着いた。朝見た晴天の空はなく、茶褐色で太陽はぼんやりとなり周囲は月夜程に暗くなっていた。

海水は沖のほうまで見えなく、海草のついた真っ黒な岩が見えた。そしてしばらくして海嘯（津波）が反撃するかのように押し寄せてきた。

一方、山津波は山側部落を押しつぶし土手をも越えて海側にも襲ってきた。倒壊、埋没した家の中から、助けを求め、泣き叫ぶ村人たちの声が聞えてきた。

「父ちゃんと母ちゃんが埋まっている。早く助けに来ておくれ」友達のトメちゃんがかみ振り乱してやってきた。余震が激しくお宮さんに非難した者は動きが取れない。ただ年寄りの念仏が無情に聞えたであろう。

安否確認や救助（が始まったの）はその日の夕刻から何日も続いた。近隣の被害は更に凄惨なものであった。結局米神だけで73名の犠牲者を出した。

根府川（白糸川）河口で遊泳中の小学生72名が山津波第一波に押し流され全員行方不明になり、根府川鉄橋の崩落により下り列車6両が海中に投入200名の乗客が惨死した。上り機関車がトンネルを出た直後、埋没し機関士が犠牲となった。

米神では一時避難の後、鉄道線路の土羽（土手）下に避難、バラックの設置が始まった。

線路敷設の際、村を分断する土手を作ることに反対し鉄橋を推奨する村民が多かったが土手の御蔭で山津波の被害を最低限防ぐことができた。

石橋、米神、根府川、江ノ浦、真鶴、福浦は山と海の迫った地形ゆえに道路が寸断されると救助、救急、避難は困難を極めた。

もともと無医村、陸の孤島となったこれらの地域では、片浦村ただ一人の駐在員、池上八三郎巡査を中心に、消防団、青年団が活躍した。

手漕ぎの小船による海上輸送で小田原（山王川へ舫う）へ出向き米、建材、医薬品の調達をはかった。小田原町は3分の2が焦土となっていたので、更に郡部の村へ資材調達に出かけた。

小田原町総人口24、000人のうち約半分の11、000余名死傷者を出した。

余震の中、焦煙は翌日4時頃まで残り、山津波の粉塵に変わって米神の空をも数日曇らせていた。

（参考資料）

震災を語る母のテープ

地震と戦争の記録ふるさと米神

（自治会・公民館）

西さがみ　第11号

午前十一時四十分小田原駅発真鶴行二、三等七輛連結ノ第百九列車ハ根府川駅ニ於テ停車セントセル瞬間同所地辷リノ為メ停車場地盤諸共海中ニ墜落、当事連結車両ノ中一車ハ海岸ニテ転覆シ其他ノ六両ハ海中ニ投入、乗客二百名及ホームニ在リタル約四十名ハ一度ニ海中ニ投下セラレ重軽傷ヲ負ヒ辛フジテ海岸ニ這ヒ上ガリ、蘇生ノ思ヒヲスル間モアラセズ襲ヒ来レル海嘯ノ為メ百八十余名ヲ浚ハレ僅ニ四十名ノ残存者在リタルガ当時遭難者ノ談ニ依レバ其惨状言語ノ外ナリシト云フ。

九月一日午前十一時四十八分真鶴発東京行二、三等列車ハ片浦村根府川鉄橋南隧道ヲ既ニ出ズントスル一刹那隧道口崩落シ機関車ノ大部分ヲ埋没シ為メニ乗込機関手及火夫一名ノ惨死ヲ見即時停車シタル為メ乗客ニハ何等ノ異状ナキ奇蹟的僥倖ヲ見タリ。

▼小田原警察署《震災情況誌》1923年

我が歌舞伎事始

田中　豊

思えば私の歌舞伎好きは、芝居見物をする祖父母に弁当を届けることから始まったのでしょうか。伊勢路は昔から芸能の盛んな土地柄で山田（現在の伊勢市）から松阪・津・四日市・桑名と名古屋に通じる街道は巡業が盛んで、大看板はとにかく関西の若手歌舞伎役者が腕を磨く結構なところであった様で度々興行が打たれました。

まだ私が幼児の頃は戦争への歩みが加速されつゝも表面的には平和を保っていました。芝居興行が巡って来ると芝居小屋、松阪座（まっつぁかざ）の「お茶子」と称する女性が桟敷席を確保して、抱えているお得覚先を廻り売りさばく形式が残っていました。興行当日にはそのお茶子さんが桟敷席にお茶から座布団・煙草盆を運ぶ等の世話をやき、客は祝儀をはずむという慣習で、現在でも相撲等でその名残が見られます。お茶子さんが紅だすきで桟敷の桟を器用に渡る姿が思い出されます。

当時の芝居見物は弁当持ちで、幕間に食事をとり一日を楽しむのが芝居好きの過ごし方でした。重箱に詰めた母が作った料理を私が楽屋口から桟敷へ届けるのですが、座主と懇意なところからそのまま居ついて芝居を見るのが常でした。楽屋口から薄暗い廊下を鬘下のままの役者が衣裳姿や、浴衣で行き交うのをワクワクして通った記憶が今もありありと頭に残っています。そう言えばその頃の芝居小屋は向かって左側が売店で、その奥を行くと便所ですから懐かしい匂いが売店前の道路まで漂っていました。

従って殆どの場合、第一幕は観られず第二幕以降になり、長い間「仮名手本忠臣蔵」の第一幕の大序「兜改め」は観ることがありませんでした。巡業の一座は関西歌舞伎が主体でしたから近松門左衛門の心中物が多く、幼い頃から艶の濃い濡れ場で私の歌舞伎は培われたのですから変な子供でした。現在の坂田藤十郎の父、二代目中村雁治郎（小津映画にもよく出演した）がま扇雀を名乗っていた頃です。その兄が林与一のお祖父さんで、林長三郎（後に林又一郎）と言い踊りの名手でしたが早世しました。芝居見（当時観劇という言葉はなかった?）を終え帰宅すると、手拭いで雁治郎被りをして『今そこ煮売屋で顔は見えねど善六、太兵衛……』と紙治（心中天網島）の出や、梅忠（恋飛脚大和往来の封印切の場を『あるぞ、まだあるぞ』と演じては祖父母にほめられ悦にいり、歌舞伎好きが段々高じられて行きました。

小学校時代、父母に連れられ大阪歌舞伎座で「義経千本桜」の通しを観たこともありました。すしやの場で「いがみの権太」役の延若が急病で、我当（後に13代目仁左南門、現15代目の父）が代役しましたが当時大根と言われた頃で、子供心に生意気にもがっかりしたものでした。家に「演劇画報」という写真雑誌があり、当時の名優「菊・吉・左」（菊五郎・吉右衛門・左団次）や15世羽左衛門、8世幸四郎達の活躍する写真を食い入る様に眺めていました。しかしそんな平和な時も長く続かず、日本は戦禍の中に飲み込まれ父にも召集令状が届き、店の若い人達も次々と戦場に駆り出されて行きました。父の様な老兵は二年ばかりで帰還出来ましたが、人手不足の上に砂糖も小麦粉や小豆も統制になり家業の和菓子の継続も難しくなって行きました。やがて終戦、世仁左衛門が食事のもつれから下宿人に殺されるという梨園らしからぬ殺伐なニュースが紙面を賑わせたのもこの頃です。

時を経て、当地に就職した私は東京歌舞伎座を初めて目にした時、その立派さと江戸歌舞伎のおおらかな時代物や黙阿弥物のいなせで気っぷ良い世話物に

目の鱗が落ちる思いで毎月歌舞伎座に通いつめました。当時は菊吉が世を去り歌右衛門や・先代幸四郎・先代勘三郎等は東宝に走り観る機会は少くなっていましたが、先々代猿之助は（後に猿翁）まだ健在で11代目団十郎（現団十郎の父）が、「源氏物語」などの新歌舞伎で巷間で〝海老様〟と嬌声に囲まれた最盛期でした。松緑・梅幸・彦三郎（後に羽左衛門）・福助（現芝翫）等中堅陣多士才々、油が乗り切った頃、関西でも寿海・寿三郎が君臨していました。勿論、貧しい時代で三階席か立見席がやっとで昼の部を観て急いで近くのそば屋でかき込み、又夜の部に駆け込み、終演一幕を残して銀座を駆け（文無しでタクシーには乗れず）新橋から電車に飛び込むという破天荒な観劇でしたが、歌舞伎が私の中で大きく膨らんで行ったあの時代が懐かしく蘇ります。

（'06・4）

落穂集

○今年も、終戦記念日が近づく。7月号は『平和への祈り』をメインテーマとして戦争の出来事を風化させず、平和な祖国の有難さを考える特集にした。

執筆者それぞれの尊い体験や調査事項を寄せていただき読み応えのある号になったと思う。

日頃『語り継ぐ』難しさを感じているが、特に青少年たちに61年前の戦争を事実だけでは本当に語り継いだことにはならない。巻頭の「太平洋戦争の頃の話」は小学生の子供に本当に分からせる努力が語られている。

「酒匂町小八幡…」も思い出して描いた絵を添えていただいたが、文章よりはるか訴えるものがあった。

なぜ戦争は起きるのだろう、何故止めないのだろう。子供たちの考える力は育っていく。

「長門の浦」は終戦直後、追われるごとく祖国を目指して引揚げた人々の御苦労が身にしみて感じられる。祖国の土を踏んだ時、小田原駅のホームに立ったとき、涙せずにはいられなかったであろう。

「小田原戊辰戦争…」は本誌200号が縁で明治維新以来138年ぶりに無名戦士一人の名前が分かったという。本誌掲載文が取り持つ縁で御子孫のお喜びは如何ばかりか。会報に関わるものとして嬉しい限りである。

○平和を打ち砕くもう一つの敵は自然災害である。予知する技術や免震構造の建築技術は格段に進歩してきているが、「今までになかった…」が被害などの古老から聞く。地震、水害、津波、土砂崩れなど世界規模で起きている。地球温暖化の現象かも知れないが、災害の基本は先人の話に耳を傾け、被害地の情報は貴重な遺産として、学ばなければならない。

小田原地方では、来るぞ、来るぞといわれながら、地震74年周期説を超え関東大震災から83年を経過した。体験を語り継ぐ人はもう少なくなり、僅かな文献・写真に頼るしかない。

防災対策に気合いを入れ、平和ボケ防止の一助として、自治会でミニ講演会を実施した。その一部を「関東大震災の片浦村米神あたり」29ページに紹介した。

○W杯に世界中が熱狂している。若者にとってはオリンピック以上の熱狂振りである。殆どのTVはいつでも、どこでもサッカーである。試合以外の話題も尽きない。大国も、小国もなく、対等にあの緑のピッチでサポーターの歓声に励まされて戦っている姿はまさに平和そのものである。

昔の映画で、第二次大戦下英軍捕虜とドイツ軍の代表選手がサッカーの親善試合を行う。

英軍側は逃亡を目的だったが試合終了後は、両軍の大観衆と共にスタジアムをでて行く。

こんなことを思い出した。

編集子　植田博之

○四六五―四八―九〇七二

訃報

柳川辰夫 氏
小田原市曽我原六二八
平成十八年五月十一日ご逝去
当会の役員を歴任され、昨年の総会、役員会に出席された。体調も回復されつつあった。地域（下曽我）の活動にも大いに貢献された。

瀬戸崎雄 氏
開成町金井島一七
平成十八年六月十八日ご逝去
十五年度の総会には、「江戸時代の小田原地方の酒」と題して酒の歴史に始まって、広範囲の興味ある話をしていただいた。
（本誌26ページ、194号参照）

東海道53次宿場めぐり　ご案内

～浜松宿から二川宿まで～（第７回）

期　　日　９月27日（水）　午前７時出発　雨天決行
受　　付　８月17日（木）　午後１時より　伊豆箱根トラベル小田原営業所（23－0266）
会　　費　6,000円
集合場所　小田原駅西口　午前６時50分までにご集合ください。
日　　程　小田原駅前西口（7:00）――浜松宿 浜松城跡（家康遠江攻めの拠点）
――舞坂宿　松並木、脇本陣（平成３年解体修理復元）
――新居宿　関所跡（全国唯一現存する関所建物）
――白須賀宿　町並、おんやど白須賀（東海道開設400年記念資料館）
――二川宿　本陣（平成３年改修復元）資料館
――小田原駅西口（19:30頃）

散策する所がありますので、動きやすい服装で参加しましょう。
今回は小田原市文化連盟と共催となります。史談会会員優先ですすめますが、ご承知おきください。受付はおそくとも８月中にすませてください。その後一般の方々の抽選の予定です。（担当　勝俣　34－3939）

第５回　東海道53次宿場めぐり（沼津宿ー興津宿）実施報告

５月17日（水）実施　参加者33名
主な見学場所
沼津宿　沼津城本丸址
原　宿　松蔭寺、渡辺本陣跡
吉原宿　妙法寺、富士市立博物館
由比宿　本陣公園、東海道広重美術館
タクシー分乗で薩埵峠へ
興津宿　清見寺

清見寺

沼津城本丸址

薩埵峠へ

松蔭寺

広重美術館見学

さくら海老館での昼食

富士市立博物館

第６回　東海道53次宿場めぐり（金谷宿ー見付宿）実施報告

参加者全員（旧見付学校）

ＪＲ東海道線事故の影響で出発が心配されましたが、15分おくれで全員集合出発する事ができました。心配された天候も少し降られた程度で予定通り参拝・見学する事ができました。ご協力ありがとうございました。

⬆　遠江国分寺跡散策

期　日　６月８日㈭

参加者　４１名

主な見学場所

金谷宿

金谷坂石畳

日坂宿

事任八幡宮

掛川宿

掛川城

御殿・ドラマ館

見付宿

旧見付学校

府八幡宮

遠江国分寺跡散策

⬇　平成の道普請石畳を歩く（金谷宿）

⬆　府八幡宮参拝

⬇　事任八幡宮参拝（日坂宿）

小学生にもどったようだ（旧見付学校内）

⬅　掛川城へ登る（掛川宿）

平成18年度

総会報告

小田原史談会

○日　　時　平成18年4月22日㈯　13時開会
○場　　所　小田原市民会館第6会議室
○総会次第　　略
○講 演 会　講師　小田原女子短期大学　専任講師　木内英実氏
　　★「中勘助文学における小田原」
○懇 親 会

平成15年度事業報告

1．創立50周年記念事業の報告並びに一般事業報告

総括報告について～創立50周年記念事業の取り組みを通して、史談会の歩みとその存在意義、果たしてきた社会的役割を再認識できた。

創立50周年記念式典の概要～総務委員会報告

記念事業は、2日間でしたが、地区委員、特別賛助会員、一般会員の皆様のご協力があって、無事成功裏に開催できました事を、御礼申し上げます。

(1) 記念式典・懇親会　　期日：11／13　会場：小田原市民会館6階

午後2時より市民会館第6会議室で、小田原市長、下村市議会議長はじめ多くの方々の出席を頂き、盛大に開催されました。来賓を代表して、市長、市議会議長の挨拶を頂き、今までの活動に対する評価と今後の活動に対する期待をいただき、会員一同更なる発展を誓った次第です。

(2) 記念講演会　講師／久野・東泉院住職　岸達志先生

演題／「小田原史談50年　小田原ゆかりの人たち」

（講演の内容／会報の第204号に掲載）

(3) 祝賀会参席者107名　（来賓25名　一般16名　賛助会員13名　会員53名）

参席者には、『小田原史談　総目録』を贈呈させて戴きました。

(4) 懇親会参加者　70名

この懇親会も大変盛況で、最高齢103歳の市川一郎氏も元気に歓談されておりました。約1時間の懇親会でしたが、大変和やかに楽しく過ごすことができました。

(5)「小田原史談会50年のあゆみ」展の開催　11月12，13の両日

この展示会の企画には、近隣の歴史愛好家団体のご協力と特別賛助会員のご協力を得て、大変充実した展示会が出来ました。

(6) 会員配布用～『小田原史談会会員名簿　創立50周年記念版』の作成

昨今は、個人情報の漏洩・悪用が何かと話題になっています。会員名簿の作成・配布は、要検討事項としてまいりましたが、創立50年のケジメ事業として、制作しました。総務委員会で保有しているデータベースは、ＰＣ内には置かず、別なメディアに保管しております。インターネットで、流出する危険性はありませんが、会員各自で取り扱いに慎重を期してください。

(7) 各事業委員会の報告～（別途・後述　3．各事業委員会報告）

2．各事業委員会報告

(1) 会報委員会報告

1．会報／記念特集号（202号、203号、204号、205号）の発行

①．第202号（7月発行）30頁
　　巻頭『六三制教育の黎明期と岡部忠夫先生』　小泉君夫

②．第203号（10月発行）28頁
　　巻頭『ビナンカズラの実の熟する頃』　田代道弥

③．第204号（1月発行）24頁
　　巻頭『小田原史談会50年の歩み』　小野意雄

④．第205号（3月発行）34頁
　　巻頭『下曽我の空の下で』　古川一枝

2．50周年関連事業（総務委員会と協働）

①．五十周年記念ロゴの作成

②．記念図書『小田原史談』総目録の作成・刊行

③．広報資料の作成（展示会ビラ、招待状　礼状　等）

④．創立記念号1（204号）で当会の沿革、会計推移等を掲載、更に記念事業（式典、記念講演会内容、懇親会、50年のあゆみ展1、など多くの写真を含めて掲載した。

⑤．創立記念号2（205号）では［50年のあゆみ展］で、模造紙各1枚に紹介された特別会員（老舗）を掲載した。

⑥．これらの事業にかかわる写真は　渡辺・植田（士）委員が担当し、ＣＤ1枚に収録した。

（永年保存）

(2) 研修委員会報告～

1．4／23(土)　総会時の講演会　演題「足柄古道あれこれ」　講師／本多秀雄氏

2．東海道五十三次宿場めぐり

	第1回	第2回	第3回	第4回
実施日	5／28	9／28	11／23～11／24	2／14
自 ～至	日本橋 ～戸塚宿	藤沢宿 ～三島宿	知立宿～桑名宿 ～四日市宿～亀山宿	府中宿 ～島田宿
参加者	32名	31名	14名	32名

(3) 語り部の会報告

1．7／22　　第2回「年中行事を語る会」　講師／西海賢二氏

2．11／12，13　　50周年記念展示会の担当

①．小田原史談会50の歩み

②．中野敬次郎氏と交流があった文人たち～書簡の展示

③．機関誌「小田原史談」の歴史

④．会報委員会、研修委員会の活動の歴史

⑤．山北地方史研究会、足柄史談会の動向

⑥．特別賛助会員の協力～ご商売の歩み、概況など

4．役員の異動についての報告～（会則第6条3項）による承認事項

平成17年度の期の中途で、理事に新任された方は、下記の2名でした。

市川清司氏（会報委員会に所属）、桜井達夫氏（語り部の会に所属）

5．「特別会計総集編積立金」の称呼変更の報告

「特別会計総集編積立金」の称呼を「特別積立金」と改称する（会則に係る変更ではない）

趣旨／会報「小田原史談」の総集編は第4巻まで刊行し、会報を第145号まで収録したが、現在は第205号まで発行されている。創立50周年記念事業絡みでの検討では、在庫残部状況、総集編という形態への購買要求の低下等々が検討され、時代不相応の発行方法され、「総目録」という形で、先人のワークの顕彰と記録保存を努め、史談会事業の周知を図った。しかし先人のワークの一つ一つに後人が接することは容易ではない。総集編刊行に代わる新しい方法の検討が課題になる。

そこでまず、積立金の称呼を改め、柔軟に対応できるようにするものである。

平成17年度の会計報告

1．平成17年度一般会計　決算報告書

平成18年３月31日

収入の部　（単位：円）

項　目	予算額	決算額	増　減	摘　　要
前年度繰越金	276,039	276,039	0	
預　り　金	45,000	37,000	△8,000	前納会費、前納賛助会費　＊
会　　費	1,275,000	1,236,000	△39,000	409名（内2年度分納入3名）＊＊
賛助会費	500,000	530,000	30,000	46法人（内2口2法人、3口1法人）＊＊＊
預金利息	8	8	0	3月9月期利息
雑　収　入	10,000	6,000	△4,000	寄付金他
合　計	2,106,047	2,085,047	△21,000	

＊前納会員5名、前納賛助会員1法人　＊＊未納会員7名　＊＊＊未納賛助会員2法人

支出の部　（単位：円）

項　目	予算額	決算額	増　減	摘　　要
総　会　費	50,000	30,207	△19,793	
会　議　費	111,000	115,812	4,812	
連　絡　費	25,000	15,196	△9,804	
会報発送費	80,000	56,311	△23,689	
交　際　費	45,000	48,375	3,375	
慶　弔　費	10,000	0	△10,000	
事務用消耗品費	25,000	6,641	△18,359	
振込手数料	10,000	6,700	△3,300	
宛名ラベル	10,000	16,968	6,968	
研修委員会費	0	0	0	別途特別会計
語り部委員会費	40,000	13,149	△26,851	
会報委員会費	40,000	20,590	△19,410	
会報印刷費	1,340,000	1,218,000	△122,000	会報年4回発行
会員名簿印刷費	10,000	56,700	46,700	創立50周年記念版
積　立　金	50,000	50,000	0	総集編積立金特別会計
ロッカー借用費	10,800	12,600	1,800	10月1日より1基追加、計3基
雑　　費	30,000	0	△30,000	
合　計	1,886,800	1,667,249	△219,551	

17年度集決算	収　　入	2,085,047
	支　　出	1,667,249
	残　　高	417,798

上記の通り一般会計決算報告をいたします。残額は18年度会計予算に繰り越します。　平成18年４月６日　会計委員　鶴井道泰　㊞

本日、会計監査の結果、一般会計、特別会計共に帳簿の処理、領収書など適切に処理されていたことを報告します。

平成18年４月６日　監事　高橋佐年　㊞　監事　佐久間俊治　㊞

総会議案は満場一致で可決されました。
講演会の後に、講師、会員、役員と共にティーパーティーを行い、50周年記念事業等を話題に楽しいひと時を過ごしました。会則一部改訂と18年度予算は次号に報告します。（総務委員会）

2．創立50周年記念事業特別会計決算報告書

自．平成17年４月１日
至．平成18年３月31日

1．収入の部　（単位：円）

科　目	決算額	備　　考
助　成　金	30,500	小田原市文化連盟より
繰　入　金	400,000	総集編積立金特別会計より
会　　費	120,000	地区役員、一般会員会費47,000、本部役員73,000
祝　　儀	301,000	招待者及び特別賛助会員より301,000（岸氏20,000含む）
雑　収　入	4,000	展示会場での本売却代金（鳥居氏著書）
合　計	855,500	

2．支出の部　（単位：円）

科　目	決算額	備　　考
会　議　費	22,180	実行委員会開催
懇親会費	184,433	記念式典後の懇親会
印　刷　費	412,440	総目録、封筒印刷代362,250、招待状、あゆみチラシ印刷代50,190
記念写真費	77,803	式典集合写真代67,500、記念式典、展示会、懇親会写真代10,303
消耗品費	41,388	展示用消耗品代36,638、事務用消耗品代4,750
通　信　費	26,530	招待状発送地
講師謝礼	20,000	岸達志氏
交　際　費	20,000	招待者御礼
振込手数料	315	印刷代送金手数料
雑　　費	900	駐車場代
小　計	805,989	
残　　高	49,511	総集編積立金特別会計に返戻
合　計	855,500	

平成18年３月31日

創立50周年記念特別会計決算、上記の通りご報告いたします。

会計委員長　鶴井　道泰　㊞
監　事　高橋　佐年　㊞
監　事　佐久間俊治　㊞

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
熱海 アオキクリニック
飛鳥亭
紳士服の アメリカヤ
㈱ アルファ
税理士 石原和夫事務所
伊勢治書店
かまぼこ
（株） オクツ 薬局
小田原ガス
小田原報徳自動車
かまぼこ 籠清
㈱カネボウ化粧品小田原工場
神尾食品工業 株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
国府津館
㈲ 小松石材店
COMTEC コムテック株式会社
さがみ信用金庫
趣味のこふく さくらい
箱根湯本温泉 雀のお宿 春光荘

小田原 久野さのかまぼこ
石寿堂スポーツ
高木整形外科医院
手打そうどん 小田原城趾前 田毎
網元直営 魚谷商
そびそ 二宮
茶半家具株式会社
ちんぎょう 本店
角田ガクブチ店
東京電力㈱小田原支社
割烹料理 うなぎ 鳥かつ楼
和菓子 菜の花
日本金属工業 箱根保養所
杉崎茂法律事務所
平井書店
㈲ 古屋花店
株式会社 報徳
建築金物 家庭金物 (株) 星崎仲吉商店
本多時計店
栄町 松坂屋
学生専科 ㊙ マルク
諸星運輸グループ
曽我の梅干 塩辛・かまぼこ 美の政
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社

小田原史談（年四回発行）
創刊 昭和三十六年一月
会創立 昭和三十年七月

禁無断転載

年会費 普通会員三千円
振替 〇〇二二〇-二二六四三三六
小田原史談会